

## SGH 事業の研究開発と生徒意識の変容 －「グローバル意識調査」結果を踏まえて－



副校長 勝山 元照

研究部主事・グローバル教育推進室長

教諭 岩見 理華

## 参加者名簿

<HP 掲載資料名簿省略>

- ・途中ワークショップを実施します。
- ・班（地域別 6 班：5～6 名）を指定しています。班別に着席ください。
- ・司会・発表係・集計係を予め割り当てています。 班の判断で交代していただいても構いません。

## 進行予定

- 16 : 40-16 : 50 説明 (学校概要, SGH 概要, 発表の主旨)  
\* パワーポイントで説明します。  
\* 資料として「SGHパンフレット」をご参照ください。
- 16 : 50-17 : 25 ワークショップ (グローバル意識調査の手法) \* 延長の可能性あり  
\* 別紙配布のワークシートを使用します。  
\* 併せて, 集計表, 付箋, 模造紙等を使用します。
- 17 : 25-17 : 35 グローバル意識調査に関する補足説明  
\* パワーポイントで説明します。  
\* 資料として, 本冊子の諸資料をご参照ください。
- 17 : 35-17 : 50 質疑

## 本冊子目次

I 参加者名簿	i
II 進行予定	ii
III 資料	
【発表資料 1】平成 27 年度グローバル意識調査結果と分析	1
【発表資料 2】平成 28 年度グローバル意識調査結果と分析	12
【発表資料 3】2015 年度グローバル・アクション・プログラム (GAP)	24
【発表資料 4】2016 年度グローバル・アクション・プログラム (GAP)	26
【発表資料 5】4 回生「課題研究」テーマ一覧	29
【発表資料 6】「課題研究」論文 評価基準	33

## 【発表資料 1】平成 27 年度グローバル意識調査結果と分析

神戸大学附属中等教育学校（2016）「第 5 章 意識調査結果と分析」

『スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発実施報告書 第 1 年次平成 27 年度』より抜粋

### 1. 調査の目的と手続き

平成 27 年度 SGH 各プログラムを実施した結果、生徒のグローバル意識がどのように変容したのかを検証するために、平成 26 年度、27 年度と継続して全学年生徒を対象に、以下のアンケート（多肢選択と自由記述）を実施した。アンケートの質問項目として、批判的思考尺度（平山・楠見，2004）、国民意識尺度（唐沢，1994）、異文化受容態度（向井・渡部，2003）、高等学校におけるグローバル教育アセスメント（石森，2011）、大学教育の分野別質保証（日本学会会議，2010）、「グローバル人材」の人材像および「グローバル人材」に共通して求められる能力（産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会，2010）等を参考に、本校教科教員の意見も聴取したうえで、神戸大学国際コミュニケーションセンターの石川慎一郎教授の監修のもと、関係教員で協議を重ね「グローバルキャリア力」に広義に関連すると思われる要因として 24 要因を抽出した。そして、それらの 24 項目を内容的な近接性に基づいて大きく 5 グループに分類した。これが資料 1 にある「A 知識力」、「B 基盤能力」、「C 人間力」、「D 課題対応力」、「E 経験力」5 観点の 24 評価項目の概要である。生徒たちにはそれぞれの評価項目（能力）について、それがどの程度重要であると認識しているかを「重要度」として、「5 大変重要である」～「1 ほとんど重要でない」、また各能力について、現在自分がどの程度達成しているかを「達成度」として、「5 ほとんど達成している」～「1 ほとんど達成していない」の 5 段階で評価させた（資料 1, Q1）。

なお、これに加えて本調査では、本校が教育目標として掲げる「グローバルキャリア人」とはどのような人材であるかという定義につき、100 字程度の作文をさせることとした（資料 1, Q2）。これによって計量的な調査では得られない学習者の意識の詳細な変化を追跡することがこの設問のねらいである。

回答の方法としては、平成 26 年度は Moodle を用いてコンピュータ教室で授業内に記名式で実施し、平成 27 年度は、マークシートで授業内に無記名で実施した。

### 2. 調査データ

アンケート調査の実施時期と回答数を表 1 に記載する。

4 回生（現 4 年生）は、SGH 本指定該当学年である。前期課程（1 年生～3 年生）の明石校舎が平成 27 年度に統合される前のデータ（平成 26 年度の 4 回生～6 回生）は住吉校舎の生徒のみのものである。6 回生（現 2 年生）については、調査実施時にインフルエンザによる学級閉鎖があったことによる欠損値も含んでいる。

表 1：アンケート調査の実施時期と回答数

	7 回生 (現 1 年生)	6 回生 (現 2 年生)	5 回生 (現 3 年生)	4 回生 (現 4 年生)	3 回生 (現 5 年生)	2 回生 (現 6 年生)	合計
平成 26 年度 (平成 27 年 1 月)	NA	70	105	106	128	136	545
平成 27 年度 (平成 27 年 12 月)	136	189	193	162	136	130	946

### 3. リサーチクエスチョン

データ分析にあたり、以下の 5 点のリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1：平成 26 年度と平成 27 年度で、全項目への「重要度」、「達成度」の回答値はそれぞれどう変化しているか。

RQ2：平成 26 年度と平成 27 年度で 5 観点への「重要度」、「達成度」の回答値はそれぞれどう変化しているか。

RQ3：平成 26 年度と平成 27 年度で、24 項目への「重要度」、「達成度」の回答値はそれぞれどう変化しているか。

RQ4：平成 26 年度と平成 27 年度で、24 項目の中で、特に上昇度が高い、あるいは低い項目は何か。

RQ5：平成 27 年度において、6 学年の学習者の「グローバルキャリア人」意識にはどのような差異がみられるか。

#### 4. 分析方法

RQ1 から RQ3 については、5 観点 24 項目の平成 26 年度、平成 27 年度の「重要度」および「達成度」の平均値を比較し、意識の変容を分析した。

RQ4 については、5 観点 24 項目の「重要度」および「達成度」それぞれについて、平成 26 年度から平成 27 年度までの伸び幅を算出し、特に伸び幅が大きい項目と小さい（もしくは減少した）項目について分析した。

RQ5 については、平成 27 年度のアンケートの自由記述回答（資料 1, Q2 と資料 2, 記述例）にテキスト処理を行い、計量テキスト分析ソフト“KH Corder”を使用し、語単位の意味内容が定まりやすい、名詞およびサ変名詞のみを対象として、データセット内での頻度を取得し分析した。ただし、順位を算出する際には「グローバルキャリア人」という定義対象に含まれる「グローバル」と「キャリア」の 2 語については例外的に頻度が高いことから分析対象から除いた。また、学年と一定以上の頻度で使用されている単語（上位 31 語）についての対応分析を行った。

#### 5. 結果と考察

##### (1) RQ1：平成 26 年度と平成 27 年度の全項目の「重要度」、「達成度」の平均の比較

全 24 項目の「重要度」、「達成度」それぞれの意識の平成 26 年度と平成 27 年度の差の検討を行うために平均値について  $t$  検定を行った。 $F$  検定により分散が等しくないことが確認されたため、Welch 検定を行った結果、「重要度」、「達成度」ともに 5%水準で有意差があった（「重要度」： $t(861.86)=-3.02, p<.05$ , 「達成度」： $t(1065.45)=-1.98, p<.05$ ）（表 1）。

表 1：平成 26 年度と平成 27 年度の全 24 項目の「重要度」と「達成度」平均値と標準偏差および  $t$  検定の結果

	平成 26 年度 (N=545)		平成 27 年度 (N=946)		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
重要度	4.02	.85	4.14	.60	-3.02*
達成度	2.68	.80	2.77	.74	-1.98*

\* $p<.05$

「重要度」については、4.02 から 4.14 まで 3% 程度の値の上昇が確認された。また、「達成度」については、2.68 から 2.77 まで同じく 3% 程度の伸びが確認された。調査対象となった生徒が個人単位で完全に同等ではないため確定的なことは言えないが、今年度の本校グローバル教育が全体として生徒のグローバルキャリアに関する意識および達成度の両面の伸長に貢献したと推察できる。

##### (2) RQ2：平成 26 年度と平成 27 年度の観点別の「重要度」、「達成度」の平均の比較

RQ1 では「重要度」、「達成度」ともに伸長が見られたわけであるが、グローバルキャリア能力の多面性を考慮すれば、全体として伸びているとはいっても、内部的に見るとそうした伸びが確認されない可能性もある。そこで、次に観点別の変化を確認した。

表 2 は、観点別能力の「重要度」、「達成度」についての平成 26 年度と平成 27 年度の平均値について  $t$  検定を行った結果である。「知識力」、「基盤能力」、「経験力」の達成度以外の項目については  $F$  検定により分散が等しくないことが確認されたため、Welch 検定を行った。「知識力」については重要度、達成度ともに有意差があった（「重要度」： $t(844.05)=-3.36, p<.05$ , 「達成度」： $t(1482)=-2.11, p<.05$ ）。「基盤能力」は重要度については有意差があったが、達成度については有意差はなかった（「重要度」： $t(794.81)=-3.45, p<.05$ , 「達成度」： $t(1482)=-1.48, n.s.$ ）。「人間力」については重要度、達成度ともに有意差があった（「重要度」： $t(795.94)=-3.72$ , 「達成度」： $t(1067.14)=-2.38, p<.05$ ）。「課題対応力」については「重要度」、「達成度」ともに有意差があった（「重要度」： $t(795.94)=-3.71, p<.001$ , 「達成度」： $t(1075.39)=-2.79, p<.01$ ）。「経験力」については「重要度」のみ有意差があった（「重要度」： $t(898.26)=-3.11, p<.01$ , 「達成度」： $t(1483)=-.56, n.s.$ ）。

表 2：平成 26 年度と平成 27 年度の観点別能力の「重要度」と「達成度」平均値と標準偏差および *t* 検定の結果

		平成 26 年度		平成 27 年度		<i>t</i> 値
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
A 知識力	重要度	4.11	.95	4.26	.66	-3.36 **
	達成度	2.71	.83	2.80	.82	-2.11 *
B 基盤能力	重要度	4.25	.94	4.40	.59	-3.45 **
	達成度	2.56	.86	2.63	.81	-1.48 <i>n.s.</i>
C 人間力	重要度	4.33	.96	4.50	.60	-3.72 ***
	達成度	2.94	.91	3.06	.84	-2.38 *
D 課題対応力	重要度	4.27	.96	4.44	.60	-3.70 ***
	達成度	2.82	.91	2.95	.86	-2.80 **
E 経験力	重要度	4.12	.94	4.26	.70	-3.11 *
	達成度	2.49	1.03	2.52	.96	-.57 <i>n.s.</i>

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

以上 5 観点能力について「重要度」，「達成度」の 10 点について調査したわけであるが，値で見る限り 10 点全てにおいて伸びが確認された。

「重要度」については，5 つの観点別能力の全てで上昇しており有意差が確認できる。今年度の本校グローバル教育が，次の 3 点に代表される幅広い取組を展開したことが生徒の意識形成に影響したと思われる。

- ①「課題研究」(Kobe プロジェクト：総合的な学習を中心に 6 年一貫で展開)
- ②「グローバルアクションプログラム (GAP)」(海外研修，国内研修，セミナー等)
- ③「教科」(ユネスコスクール ESD の授業，グローバルな時空間認識の育成を目指す地歴新科目等)

「達成度」については，「知識力」，「人間力」，「課題対応力」について上昇しており，上記取組が影響を与えたと推察される。

一方，「基盤能力」，「経験力」の 2 観点では有意差は見られないというレベルにとどまった。「基盤能力」については，探究活動や交流体験等を経験したからといって一朝一夕に獲得できるものではないことから，今後の経緯を追跡したい。「経験力」については 5 年生で全員参加の海外研修旅行を実施しているが，他に言えば，事業数そのものは多く展開しているものの，参加者数が限られていること，事業に参加していない生徒への体験の還元方法および体験を内在化させる事後学習等に課題があると分析している。

### (3)RQ3：平成 26 年度と平成 27 年度の観点別各項目の「重要度」，「達成度」の平均の比較

まず，RQ1 では平成 26 年度と平成 27 年度の全項目の「重要度」，「達成度」の平均を比較し，両項目とも有意な伸びが確認された。

次に RQ2 において，5 観点別に同様の比較を行った結果，全観点において値が上昇し，10 項目中 8 項目で有意差があった。

RQ3 では 5 観点の各項目について比較検討した。図 1～図 5 は観点別に各項目の年度ごとの平均値をレーダーチャートに表したものである。

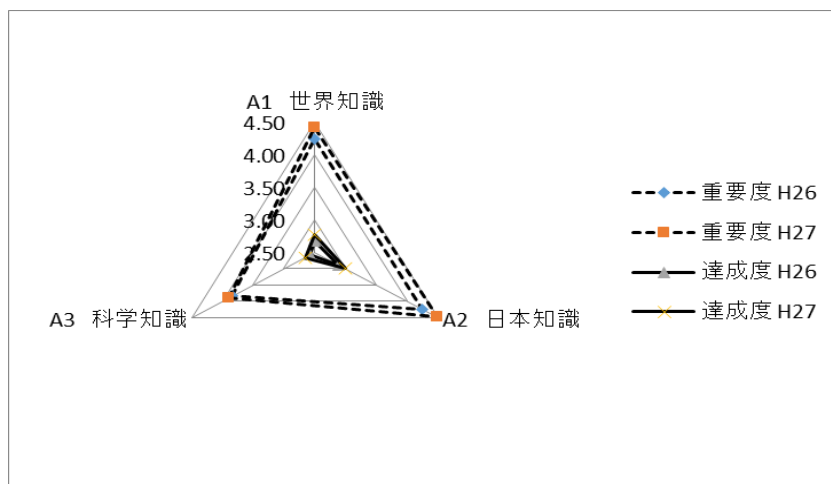


図 1：平成 26 年度と平成 27 年度の「知識力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容（平均値）

図1より、「世界知識」、「日本知識」、「科学知識」のなかで、「科学知識」のみが重要度、達成度ともに他の知識と比べ低いことが確認された。SGH 事業は、文系能力、理系能力ともに備えた世界でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目標としているが、生徒たちは日本や世界に関する知識は重要であると考え、またそれなりに達成感を感じているが、科学知識については重要であるという意識はそれほど持っていないようである。この理系知識の涵養を目指す事業の開発が今後の課題となるであろう。

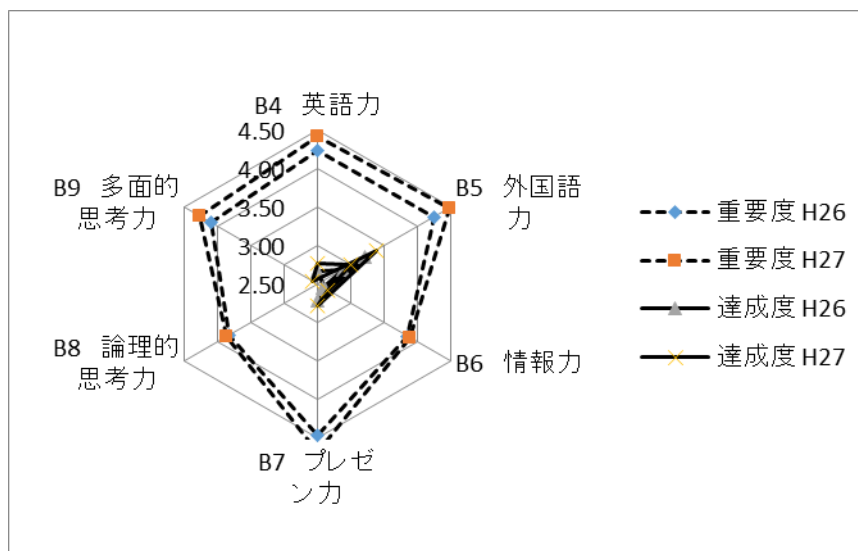


図2：平成26年度と平成27年度の「基盤能力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容（平均値）

図2より、「基盤能力」の観点では「情報力」と「論理的思考力」の値が重要度、達成度ともに比較的低いことがわかる。ここでも「知識力」の観点で理系知識に対する意識の低さと同様の課題が見えてくる。本校がこれまで提供してきた海外派遣等の事業が、どちらかといえばコミュニケーション重視で対人関係構築を目指した人的交流事業が中心となっており、入手した情報を論理的に読み取る力や、冷静にじっくり考える力等、いわゆる「理系力」を育成するプログラムが不足していたのではないかという反省にもつながる。

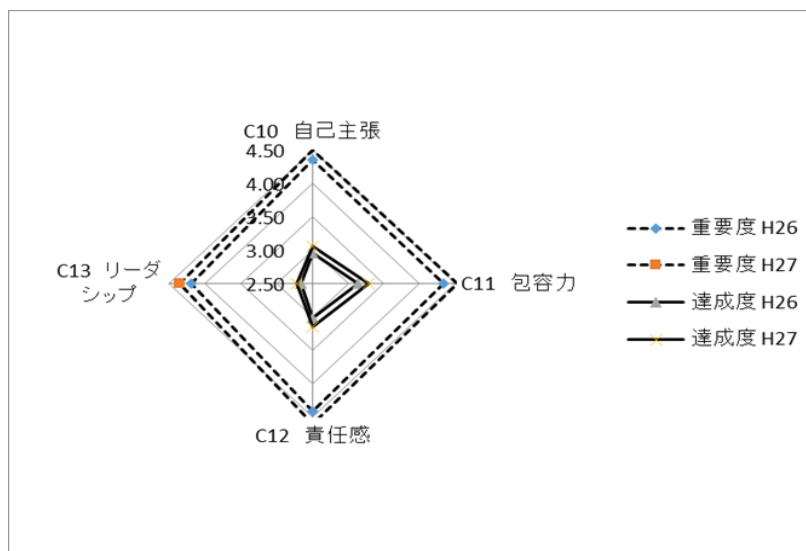


図3：平成26年度と平成27年度の「人間力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容（平均値）

「自己主張」、「包容力」、「責任感」、「リーダーシップ」といった能力は、「グローバルキャリア力」、特に「グローバルリーダーシップ」のなかで非常に重要な能力である。図3をみると「人間力」の各項目の能力については、調査対象者は少なくとも重要度に対する意識は高い。ただし、「リーダーシップ」については重要度と達成度の差が大きい。つまり、重要であると認識しているのに、達成できているとは思っていない

生徒の割合が高いということから、今後はリーダーシップが培われるようなプログラムを導入していく必要がある。

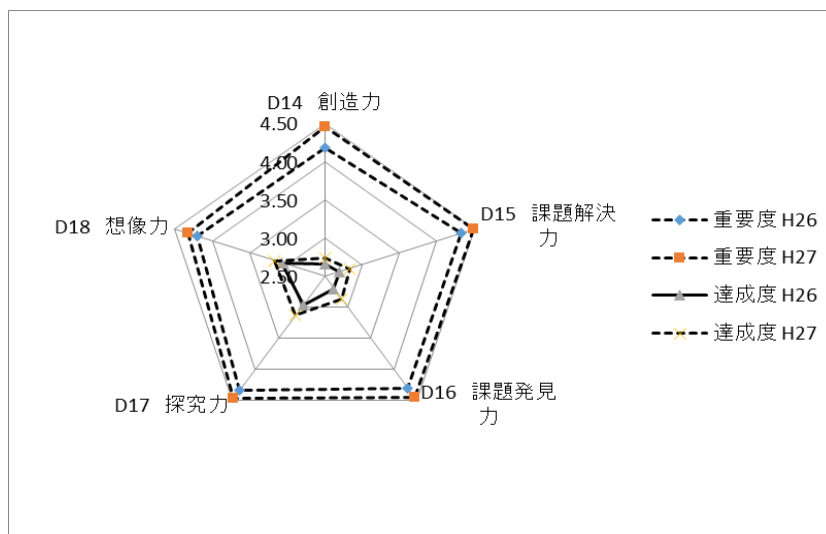


図4：平成26年度と平成27年度の「課題対応力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容（平均値）

図4の「課題対応力」について見ると、「人間力」同様どの項目においても重要度に関する意識は高い値を示している。このことは本校が行っている課題研究を中心としたKobeプロジェクト（総合的な学習の時間）に取り組んだ結果、これらの能力が重要であると認識できるようになったと推察できる。しかしながら、「創造力」および「課題解決力」の達成度が低いことから、Kobeプロジェクトを指導する際には、生徒が自律して独創的に課題を解決していくことができる指導の在り方についても検討することが必要であろう。

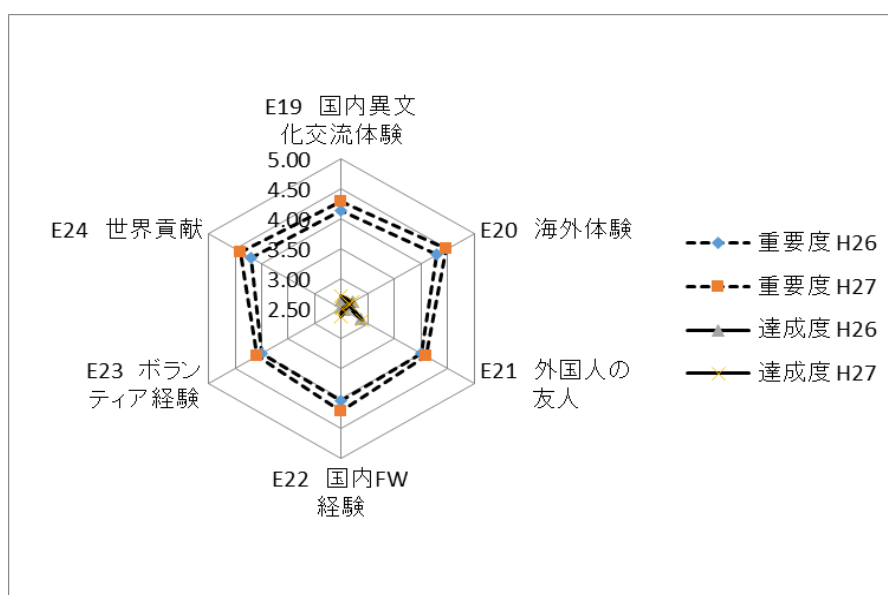


図5：平成26年度と平成27年度の「経験力」の各項目に対する「重要度」と「達成度」意識の変容（平均値）

図5より、「経験力」について、「外国人の友人」、「ボランティア体験」、「世界貢献」の達成度意識の平均値は下がっている。このことについては、追跡調査を実施しなくてはわからない点も多いが、本校が展開している国内外の体験事業が「交流」、「探究」レベルにとどまっており、「貢献」を意識した積極的要素を盛り込めていないことが影響していると思われる。

(3)RQ4：平成26年度と平成27年度の各項目の「重要度」、「達成度」の伸び幅の比較

表3に、平成26年度から平成27年度への「重要度」および「達成度」に対する意識の伸び幅が大きい項目を、表4に伸び幅が小さい（ないしは減少している）項目を記載し、全項目の伸び幅を図6に示す。



表 3：平成 26 年度から平成 27 年度への「重要度」および「達成度」に対する意識の伸び幅が大きい項目

	重要度				達成度		
	H26	H27	伸び幅		H26	H27	伸び幅
D14 創造力	4.19	4.46	0.28	B6 情報力	2.39	2.58	0.19
A2 日本知識	4.24	4.48	0.24	D17 探究力	2.96	3.13	0.17
B4 英語力	4.46	4.68	0.22	D16 課題発見力	2.70	2.86	0.16
B7 プレゼン力	4.40	4.61	0.22	B7 プレゼン力	2.81	2.98	0.16
E24 世界貢献	4.20	4.40	0.20	E22 国内FW経験	2.48	2.64	0.15
C12 責任感	4.42	4.61	0.20	C11 包容力	3.14	3.28	0.15
C11 包容力	4.34	4.53	0.19	D15 課題解決力	2.69	2.83	0.14

表 4：平成 26 年度から平成 27 年度への「重要度」および「達成度」に対する意識の伸び幅が小さい（ないしは減少している）項目

	重要度				達成度		
	H26	H27	伸び幅		H26	H27	伸び幅
B5 外国語力	3.83	3.87	0.04	B5 外国語力	1.79	1.62	-0.16
A3 科学知識	3.84	3.89	0.05	E23 ボランティア経験	2.41	2.36	-0.04
E23 ボランティア経験	4.01	4.09	0.09	E21 外国人の友人	2.55	2.52	-0.03
E21 外国人の友人	4.01	4.10	0.09	E24 世界貢献	2.13	2.11	-0.02
D18 想像力	4.20	4.33	0.13	E20 海外体験	2.70	2.72	0.02
D17 探究力	4.33	4.47	0.13	C13 リーダシップ	2.66	2.71	0.05
B8 論理的思考力	4.33	4.47	0.14	B9 多面的思考力	2.85	2.90	0.05
B9 多面的思考力	4.41	4.55	0.14	A3 科学知識	2.58	2.65	0.07

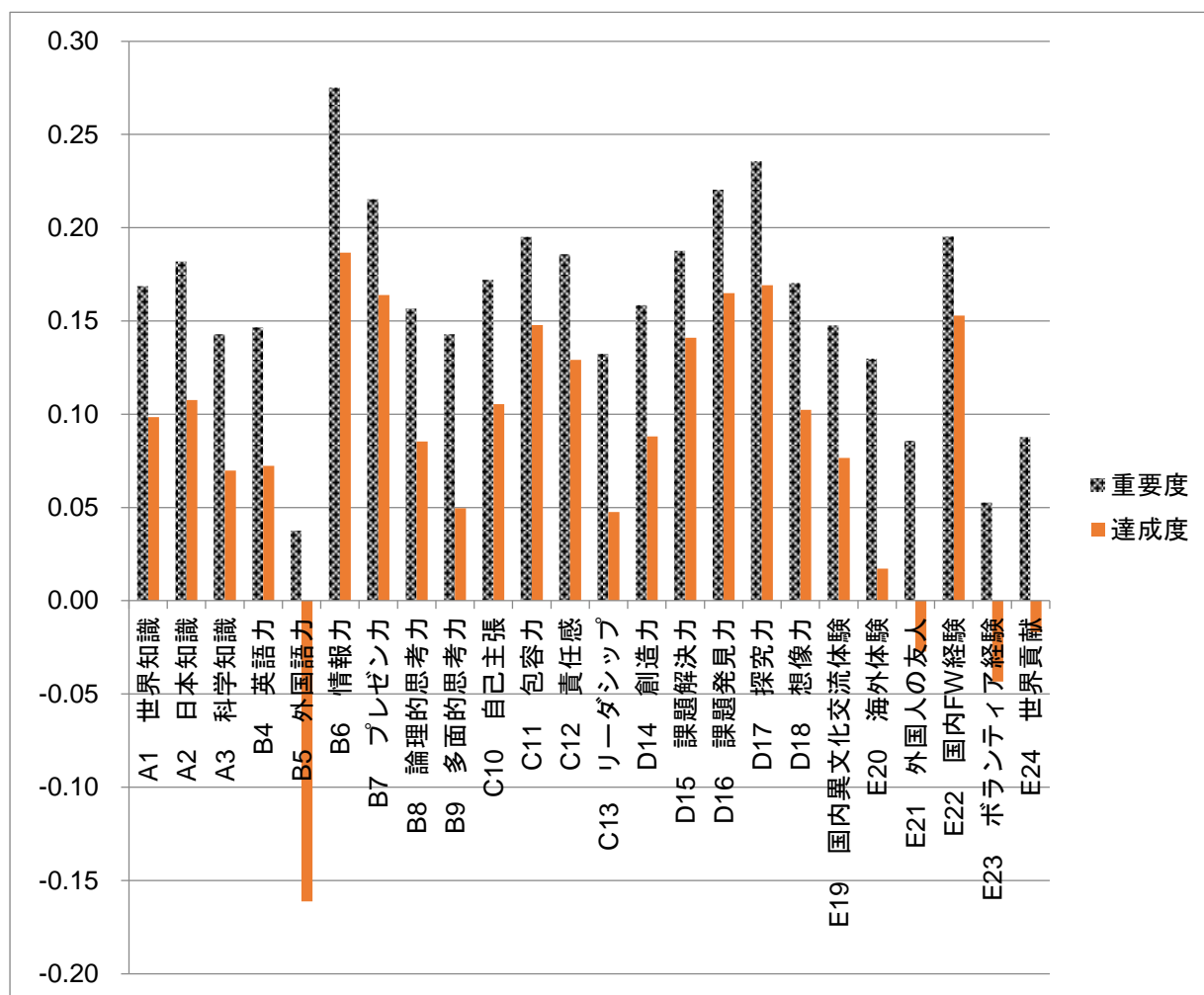


図 6：平成 26 年度から平成 27 年度への全項目の「重要度」および「達成度」に対する意識の伸び幅

特に「情報力」や「探究力」、「課題発見力」、「プレゼン力」の伸び幅が比較的大きい。

一方、「(英語以外の) 外国語」、「ボランティア経験」、「外国人の友人」、「世界貢献」については伸び幅が減少している。

「情報力」、「探究力」、「課題発見力」、「プレゼン」力については、Kobe プロジェクトを中心に実施している「課題研究」や「教科」等でも多面的に育成していることからその効果が出ていると思われる。

一方、伸び幅が減少している「(英語以外の) 外国語」については、第二外国語の授業あるいは放課後等を利用した講座の開設が遅れていることが影響している。同じく伸び幅が減少している「外国人の友人」、「ボランティア体験」、「世界貢献」については、RQ3 の結果と考察で述べたように、本校が展開している国内外の体験事業が「交流」、「探究」レベルにとどまっており、「貢献」を意識した積極的要素を盛り込めていないことが影響していると思われる。また、5年生の全員が海外研修旅行を経験しているのにもかかわらず、「海外体験」の達成度についての伸び悩みについては、参加生徒が達成感を実感できるような事後学習およびアフターケアプログラムの必要性を感じる。

### (3) RQ5 : 統計的ポジショニング比較

表5は、平成27年度のアンケートQ2の「グローバルキャリア人」の定義についての自由記述回答で出現頻度が高かった10個の単語(ただし、「グローバル」と「キャリア」の2語を除く)を学年ごとに抽出した結果である。

表5:「グローバルキャリア人」の定義に関する各学年の出現頻度数10位までの形態素

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
1年(G1)	世界	自分	文化	意見	英語	外国	交流	知識	他国	解決
2年(G2)	世界	自分	外国	解決	英語	考え	意見	貢献	行動	人々
3年(G3)	世界	自分	解決	英語	考え	外国	意見	貢献	能力	活躍
4年(G4)	世界	自分	意見	英語	外国	行動	視野	考え	解決	物事
5年(G5)	世界	自分	意見	英語	考え	文化	視点	物事	行動	解決
6年(G6)	世界	自分	意見	視野	解決	行動	人物	考え	活躍	知識

全学年共通して出現頻度が高い語は、「世界」、「自分」、「意見」、「解決」の4語で、1年生から4年生までは「外国」、1年生から5年生までは「英語」、2年生から5年生までは「考え」、全学年で「行動(1, 2, 4, 5, 6年生)」または「活躍(3, 6年生)」の出現度が上位を占めている。1年生のみ「交流」が6位の頻度で出現している。

図7は、対応分析により「学年」と「単語」(名詞:出現頻度数上位23語とサ変名詞:出現頻度数上位8語)を散布図にマッピングした結果である。

学年については、データの連関の39%を説明する「成分1」軸(横軸)に注目すると、左側に1年生(G1)、右側に2年生(G2)~6年生(G6)が集中して存在している。したがって、横軸は1年生と2年生以上を区分する軸と解釈できる。発達の節目という観点からいうと、グローバル意識の成長においては1年生と2年生の間に、ある種の大きな境界線、つまり質的な変化が起こっていると読み取れる。本校の1年生は、附属小学校からの連絡進学者と外部受験者から成る様々な背景を持つ生徒から構成されているが、SGH事業が後期課程を中心に展開されているとはいえ、1年間本校でグローバル教育を受けることが、生徒の成長を質的に変化させているととらえることができる。

1年生のグローバル意識は、「文化」、「人々」、「交流」「世界」、「外国」、「積極」、「知識」、「コミュニケーション」という言葉で特徴づけられ、2年生以上のそれは「物事」、「視野」、「視点」、「考え」、「活躍」、「課題」、「解決」といった言葉で特徴づけられていることがわかる。1年生のグローバルキャリア人のイメージは「海外に行き、積極的にコミュニケーションをして異文化の人と交流する人」であり、2年生以上になると、「単に外国の人と交流するだけでなく、もっと明確に自分の意見を発信し、自分の能力を活用して世界の課題解決に対して貢献できる人」ということになる。したがってグローバル意識の特徴は、1年生は「文化交流」、2年生以上は「世界貢献」というキーワードでまとめることができる(図7,白抜き横向き矢印)。

次にデータの連関の33%を説明する「成分2」軸（縦軸）に注目すると、4年生（G4）を境界点として上部に2年生（G2）と3年生（G3）、下部に5年生（G5）と6年生（G6）が集中している。これにより、縦軸は本校の前期課程2、3年生と後期課程5、6年生の差を表していると考えられる。前述のとおり、4年生（G4）は縦軸上では原点付近に位置しており、それ自体縦軸上での特徴はみられない。

縦軸上部の2年生（G2）と3年生（G3）を特徴づけている言葉（「社会」、「世界」、「課題」、「解決」、「貢献」等）から、2、3年生の考えるグローバルキャリア人とは、「世界（異文化の人々、海外の人々）と交流してひとつの課題を解決していける人」となる。5、6年生は、「視点」や「視野」という言葉が出現していることから、「(外的に行動せずとも) しっかりとした視点や視野を持って物事を発信できる人」がグローバルキャリア人であるととらえていると考えることができる。したがって、2、3年生の縦軸は「外的行動」、5、6年生は「内的行動」という言葉で特徴づけることができる（図7、白抜き縦向き矢印）。

以上のことから、グローバル意識について本校生徒の6年間の変化をとらえていくと、1年生、2・3・4年生、4・5・6年生の3つのグループに分けることができる。1年生から4年生は「文化交流」から「世界貢献」への外向きの視点獲得、4年生～5年生は「外的行動」から「内的行動」への思考の深化、そして卒業年次の6年生では、「視野を広く持ち、海外で行動し、積極的に意見を発信していく人材」になりたいと考えるようになるという発達モデルとなる（図7、網掛矢印）。

今後はそれぞれの学年の特徴を踏まえ、各発達段階でグローバル意識が高められるような適切なプログラムの開発がのぞまれる。特に2回の質的な変化を経験する4年生には集中的にのぞましいケアをしていくことが重要である。

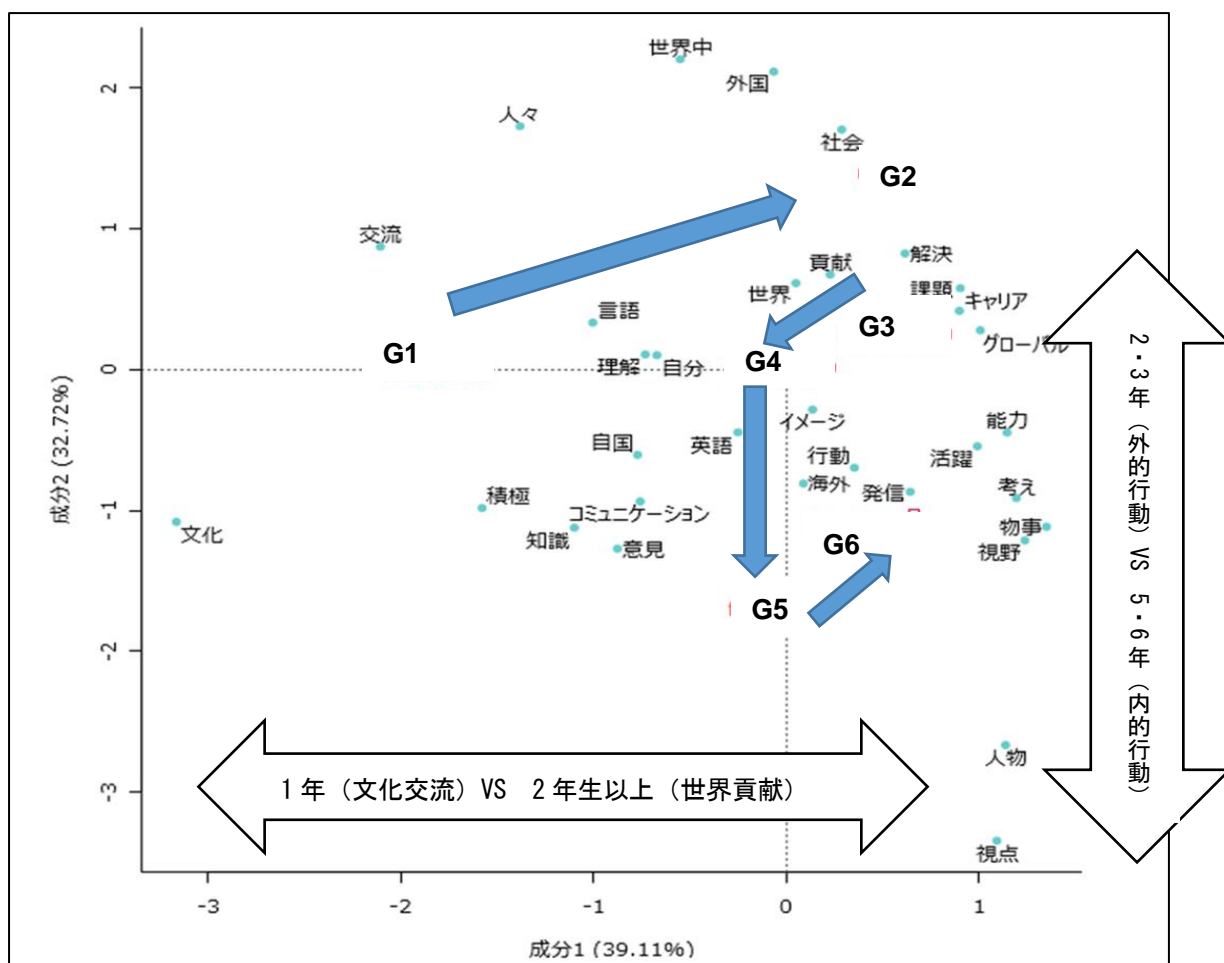


図7：対応分析による散布図

## 6. まとめと今後の課題

RQ1の結果より、本校が教科授業や「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」、グローバルアクションプログラム（GAP）等、全校あげて展開しているグローバル教育が生徒のグローバル意識を高めていることが

推察される。今後は今年度に実施した様々な事業について、事業ごとに評価を行って内容の改善を図る必要がある。各事業の効果を評価し、授業の精選および新規事業について検討を行うためには、共通の評価フォーマットの開発が急がれる。

RQ2, RQ3, RQ4 の結果より、「情報力」、「探究力」、「課題発見力」、「プレゼン力」等の意識の高さや、伸び率の向上がみられたことにより、Kobe プロジェクトの指導が効果的であったことが示唆された。一方、「経験力」の達成度が伸びていないことがわかった。特に海外修学旅行等、学年全体で取り組む事業については、異文化交流や海外体験が実感でき、英語の学習も含め今後の学習や研究に対する意欲が持続・向上するような事後学習とアフターケアプログラムを考えていくことが肝要であることが示唆された。また、渡航費用支援等で、参加人数に制限のある海外派遣事業については、特定の生徒（例えば、英語力重視のプログラム）に参加が偏らないように、対象生徒や内容のバランスを考える必要がある。例えば、本年度新規開拓したベトナムの交流校については、日本語学習者がいることから、英語が苦手な生徒が日本語を用いて交流するプログラムを設ける等の可能性がある。また、「経験力」のなかでも、「外国人の友人」、「ボランティア経験」や「世界貢献」に関する項目についての達成度が低かった。国内プログラムで異文化の人たちと多く交わる機会（例えば留学生との交流等）を増やすことや、地域連携型のプロジェクトを立ち上げることにより、改善がみられるかもしれない。

Q4 の結果より、前期課程 1 年生から卒業年次（後期課程 6 年生）までの本校生徒のグローバル意識の発達モデルが、「文化交流」、「外的世界貢献」、「世界貢献のための内的行動」への深化であることが観察され、各発達段階に応じてグローバル意識が向上するようなプログラムの開発の必要性が示唆された。特に意識の変化点に存在する 1 年生と 4 年生に適切なプログラムを提供する必要性が改めて確認された。現在行っている留学生や JICA 研修員との交流、ESD の食育に関するプログラム、アートマイル、海外派遣プログラム等について、テーマや内容（日本文化の紹介も含む身近な文化についての意見交換→特定のテーマについての協働学習→課題解決のための提言発信→地域実践→世界貢献）を有機的に組み合わせることにより発達段階に応じたプログラムの適切化を図りたい。

最後に、本校 SGH 事業を評価・検証をするにあたり、リサーチクエストそのものの設定および現在実施しているアンケートの質問項目の追加や、結果データを利用した分析方法についてさらに検討を行っていきたい。

## 謝辞

本調査の実施および分析にあたっては、神戸大学国際コミュニケーションセンターの石川慎一郎教授に御指導を賜った。多くの示唆に富む御助言に心より感謝申し上げる。

## 参考文献

- 石川慎一郎 (2015) 「学習者のグローバル意識の変化を観察する測定手法の開発と検証：コーパス言語学を応用した自由記述型回答データの分析」. グローバル教育, 17 2-16.
- 石森広美 (2011) 「高等学校におけるグローバル教育のアセスメント指標と実践枠組みに関する研究」. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第 59 集・第 2 号, 193-219.
- 産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 (2010) 「報告書～産学官でグローバル人材育成を～」. [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/2010globalhoukokusho.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf) . (2016. 2. 15 閲覧).
- 日本学術会議 (2010) 「回答 大学教育の分野別質保証の在り方について」. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf>. (2016. 2. 15 閲覧).
- 平山るみ・楠見孝 (2004) 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響—証拠評価と結論生成課題を用いたの検討—. 教育心理学研究, 52, 186-198.
- 向井有里子・渡部美穂子 (2005). 異文化受容態度：日・独・英の比較. 比較文化研究—日本・ドイツ・イギリス—都市文化センター. [http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/wp-content/uploads/2005/03/200503\\_hikakubunkakenkyu.pdf](http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/wp-content/uploads/2005/03/200503_hikakubunkakenkyu.pdf). (2016. 2. 15 閲覧).

資料1：「グローバルキャリア人」アンケート

Q1：あなたがイメージする「グローバルキャリア人」にとって以下の項目がどの程度、重要（重要度）であると思いますか。また、それぞれの項目をどの程度、今のあなたは達成している（達成度）と思いますか。5から1で答えなさい。

	重要度	達成度
5	大変重要である	ほとんど達成している
4	ある程度重要である	ある程度達成している
3	どちらとも言えない	どちらとも言えない
2	あまり重要でない	あまり達成していない
1	ほとんど重要でない	ほとんど達成していない

A	知識力	A1	世界に関する知識	重要度	達成度
		A2	日本に関する知識	重要度	達成度
		A3	自然科学に関する知識	重要度	達成度
B	基盤能力	B4	英語力	重要度	達成度
		B5	英語以外の外国語能力（中国語、ドイツ語などの外国語）	重要度	達成度
		B6	情報分析力（ICTなどを利用して入手した情報がどのような意味を表すのかなどを考える力）	重要度	達成度
		B7	プレゼンテーション力（多くの人の前で調べたことなどを発表する力）	重要度	達成度
		B8	論理的思考力（物事を筋道を立てて考える力）	重要度	達成度
		B9	多面的思考力（1つの考え方にとらわれずにさまざまな角度から考える力）	重要度	達成度
C	人間力	C10	自己主張（自分の意見・考えをはっきり表現すること）	重要度	達成度
		C11	包容力（考えの異なる人を受け入れる力）	重要度	達成度
		C12	責任感（途中で投げ出さず最後までやり抜く姿勢）	重要度	達成度
		C13	リーダーシップ（率先して行動し、他の人を引っ張っていく力）	重要度	達成度
D	課題対応力	D14	創造力（今までにない新しいことを創りだす力）	重要度	達成度
		D15	課題解決力（困難や未解決の問題を解決していく力）	重要度	達成度
		D16	課題発見力（何が問題であるか、何が未解決のことなのかなどを見つける力）	重要度	達成度
		D17	探究力（好奇心をもって自ら調べていこうとする力）	重要度	達成度
		D18	想像力（自分が直接体験していないことをイメージできる力）	重要度	達成度
E	経験力	E19	国内での異文化交流体験（日本に在留したり訪日したりしている外国人と交流すること）	重要度	達成度
		E20	海外での実体験（海外に直接行ってさまざまな体験をすること）	重要度	達成度
		E21	外国人の友人（国内外で外国人の友人を作ること）	重要度	達成度
		E22	国内フィールドワーク経験（直接現地に行って地元の人と話したり調査したりすること）	重要度	達成度
		E23	ボランティア経験（校外で清掃活動や介護施設等で手助けをすること）	重要度	達成度
		E24	世界貢献（世界の諸問題を解決するために行動すること）	重要度	達成度

Q2：あなたが考える「グローバルキャリア人」とはどんなイメージですか。100語程度でその人物像について書きなさい。

## 資料2：「グローバルキャリア人」アンケート自由記述（Q2）〈抜粋〉

### [1年生] 1年生

- 世界の人と旅行先、ボランティア活動、仕事などで関わって、自分の国（日本）についての文化、伝統を伝え、広げることができる人。自分の意見や考えなどを、知っている“語”の知識で、プレゼンテーションなどができる人。新たな意見、知識が生みだせる人。
- 私の考えるグローバルキャリア人は日本についてよく知っていてそれに加えて世界のことも知っている国際的な人だと思います。また、実際に外国人とも交流して話し外国と日本の情報共有ができるのもグローバルキャリア人だと思います。

### [2年生]

- 様々な形にとらわれずに、常に新しい物事を作り続けることのできる人間。しかし、べつに社会貢献などをむやみにする要はないと考えていて、それが使命だと考えるならしたらいいけれども、すべての人にキャパというものがあるのでグローバルキャリア人でも社会のためにしないとイケないということはないと考えています。
- 世界に通用する人で自分の考えをしっかりとっていてプレゼンテーションなどができる。また、「英語が話せる」というのが一番に思い浮かびます。

### [3年生]

- グローバルキャリア人とは世界目線で物事を考えることができ多方面からこれまでとは違うような意見考えをちゃんと理由と共に述べる人というイメージ。
- 私が考える「グローバルキャリア人」とは、世界中どこへ行っても人のために活動して、何かしらの結果を残せる人だと思います。具体的には、海外経験が豊富で発想力豊かな人です。今、世界には問題があふれているので、それを解決できるような人がグローバルキャリア人だと思います。

### [4年生]

- 様々な言語が話せる、とか海外を飛び回っているとかそういう人もグローバルキャリア人なのかもしれないけど、私は広い心を持って世界中のために何かひとつでも行動を起こそうとしている人がグローバルキャリア人だと思う。
- 私はグローバルキャリア人は、世界規模の視野を持ちつつ、足元を見直して、自分の言動や行動を慎むことができる人。また、文化面では、他の様々な文化から、良さを見い出したり、自分自身の良さも、適切に、発信していける人。

### [5年生]

- 多面的思考を持っていて、英語が特に話せて、コミュニケーションをとるのが上手な人。そして、自分から何かをよくやり、発表したり自己主張をよくして、周りの人のことをよく考えることができる人。
- 私が考えるグローバルキャリア人のイメージは、物事を広い視野でさまざまな観点から観ることのできる人だと思います。それに加え、英語が話せて、海外の人ともコミュニケーションをとることができる人のことを指すと思います。

### [6年生]

- 自分以外の人、物、土地、関係、環境など全てのことを考え、自分の行動がそれらにどのように関係をしているかを考えながら行動することができる人物さらに、それらを良い方向にむけることができる人物は真のグローバルキャリア人であると考えている。
- グローバリキャリア人とは、あらゆる国際的な問題に対しても自分の主張をもち、他人の意見もとり入れ、画期的な想像力にあふれる解決策を生みだし、最後までやりとげることのできる人。

## 【発表資料 2】平成 28 年度グローバル意識調査結果と分析

神戸大学附属中等教育学校（2017）「第 5 章 グローバル意識調査結果と分析」。

『スーパーグローバルハイスクール（SGH）研究開発実施報告書 第 2 年次平成 28 年度』より抜粋

### 1 調査の目的と手続き

本校では、SGH 事業を実施した結果、生徒のグローバル意識がどのように変容したのかを検討するために、SGH アソシエイト指定の平成 26 年度より 3 年間継続してアンケート調査を実施している。アンケートの質問項目を決定した経緯の詳細については、本校『SGH 研究開発実施報告書第 1 年次平成 27 年度』に記載している。神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターの石川慎一郎教授の監修のもと「グローバルキャリア力」に広義に関連する 24 要因を抽出し、それらの 24 項目を内容的な近接性に基づいて 5 つのカテゴリー（「A 知識力」、「B 基盤能力」、「C 人間力」、「D 課題対応力」、「E 経験力」）に分類した。生徒たちにはそれぞれの評価項目（能力）についての「重要度」と「達成度」を 5 段階で評価させた（資料 1, Q1）。また、計量的な調査では得られない生徒の意識の詳細な変化を追跡することを目的として本校が教育目標として掲げる「グローバルキャリア人」について 100 字程度の自由記述回答を求めた（資料 1, Q2）。回答の方法としては、平成 26 年度は Moodle を用いてコンピュータ教室で授業内に記名式で実施、平成 27 年度と平成 28 年度はマークシートを用いて授業内で実施した（ただし、27 年度は無記名式）。

### 2 調査データ

アンケート調査の実施時期と回答数を表 1 に記載する。4 回生（現 5 年生）と 5 回生（現 6 年生）は、SGH 本指定の対象学年である。平成 26 年度の 4 回生～6 回生は明石校舎が統合される前の住吉交校舎の生徒のみのものであり、平成 26 年度の 6 回生は調査実施時にインフルエンザによる学級閉鎖があったことにより一部のクラスのデータが欠損している。

表 1：アンケート調査の実施時期と回答数

	8 回生 (現 1 年生)	7 回生 (現 2 年生)	6 回生 (現 3 年生)	5 回生 (現 4 年生)	4 回生 (現 5 年生)	3 回生 (現 6 年生)	合計
平成 26 年度 (平成 27 年 1 月)	NA	NA	70	105	106	128	409
平成 27 年度 (平成 27 年 12 月)	NA	136	189	193	162	136	816
平成 28 年度 (平成 28 年 12 月)	120	141	176	179	158	134	908

### 3 リサーチクエスチョン

データ分析にあたり、以下の 3 つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ1：学校全体で平成 26 年度から平成 28 年度の 5 観点 24 項目への「重要度」、「達成度」の回答値はそれぞれどう変化しているか。

RQ2：平成 28 年度において、全学年の生徒の「グローバルキャリア人」意識にはどのような特徴がみられるか。  
また、それは平成 27 年度の特徴と比較してどう変化したか。

RQ3：SGH 指定の平成 27 年度から SGH 事業を経験した 3 回生（現 6 年生）と 4 回生（現 5 年生）の「グローバルキャリア人」意識には 2 年間でどのような変化がみられるか。

## 4 分析方法

RQ1 については、5 観点 24 項目の平成 26 年度、平成 27 年度、平成 28 年度の「重要度」と「達成度」の平均値を比較し、意識の変容を分析した。

RQ2 と RQ3 については、平成 27 年度と平成 28 年度のアンケートの自由記述回答（定義文）をテキスト処理し、語単位の意味内容が定まりやすい名詞およびサ変名詞のみを対象として計量分析ソフト（KH Coder）を用いてデータセット内での頻度を取得し、分析した。ただし、順位を算出する際には「グローバルキャリア人」という定義対象に含まれるために出現頻度が例外的に高い「グローバル」と「キャリア」の 2 語については分析対象から除外した。また、学年と一定状の頻度で使用されている単語（平成 27 年度 名詞：出現頻度数上位 31 語、サ変名詞：出現頻度数上位 8 語、平成 28 年度 名詞：出現頻度数上位 30 語、サ変名詞：出現頻度数上位 14 語）についての対応分析を行った。

## 5 結果と考察

(1)RQ1:平成 26 年度から平成 28 年度への 5 観点 24 項目の「重要度」,「達成度」の平均の比較図 1~24 は、全学年生徒の全 5 観点 24 項目について平成 26 年度から平成 28 年度までの「重要度」と「達成度」の平均値の変化を表したものである。一元配置分散分析を行った結果、有意な伸びが観察された項目については、図に記載している (\*: $p<.05$ , \*\*: $p<.01$ , \*\*\*: $p<.001$ )。

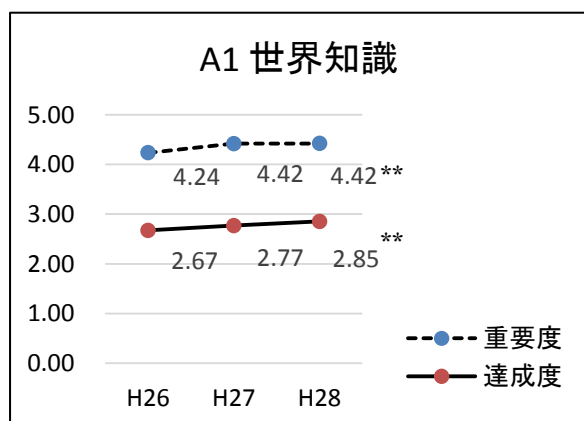


図 1

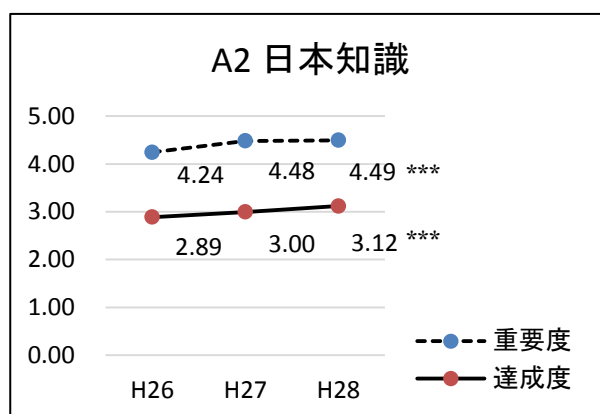


図 2

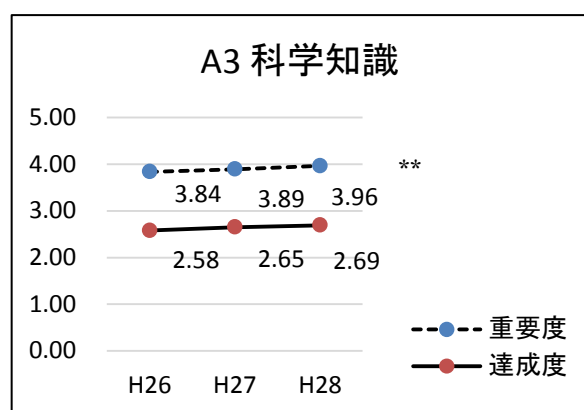


図 3

A「知識力」(図 1~図 3)については、A1「世界知識」(図 1), A2「日本知識」(図 2), A3「科学知識」(図 3)の全項目で「重要度」に関する意識が高い。また、A1・A2で「達成度」についての意識が高まっている。ただし A3「科学知識」は「重要度」「達成度」共に低い。また、「世界」や「日本」の理解については、「SGH 事業アンケート(生徒)」でも同様の結果が出ている。

本校では教科の授業改革は進んでいるが、知識量が増えているわけではないので、上記理由として、「課題研究」や「グローバル・アクション・プログラム(以下 GAP)」をはじめとする SGH 事業の影響から、知的関心が高まったことが考えられる。一方、「科学」はグローバル認識にとって必要不可欠なものであり、



一定の事業は展開しているが、理数系の教科とも連携を図りながら、科学知識を涵養する事業をどう開発するかが課題である。

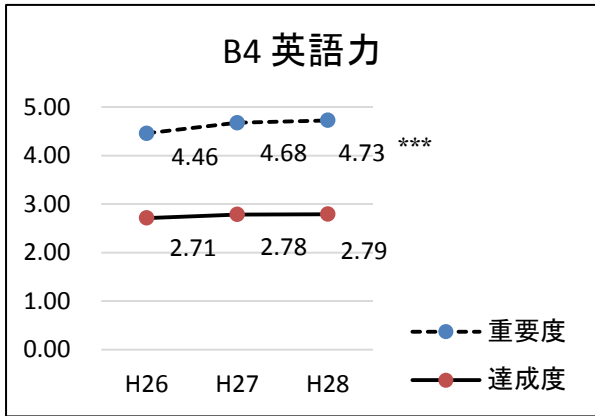


図 4

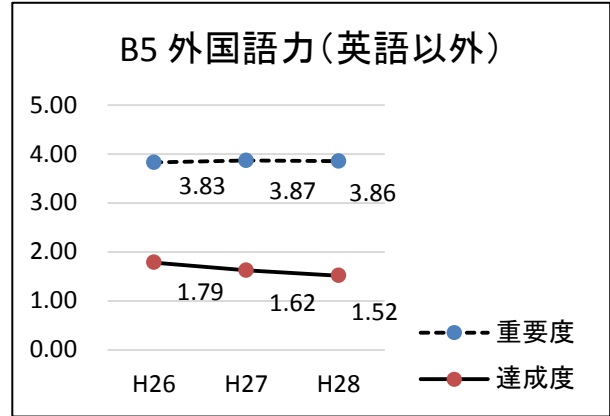


図 5

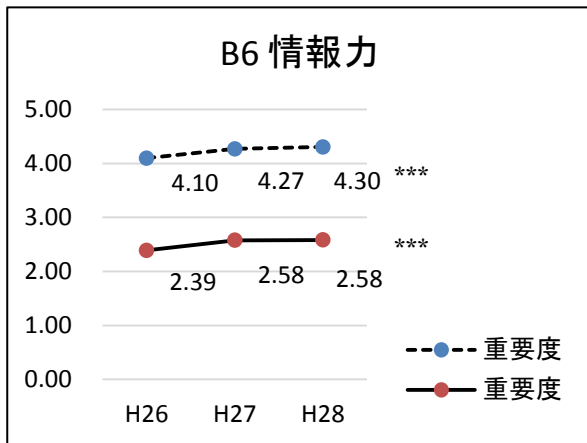


図 6

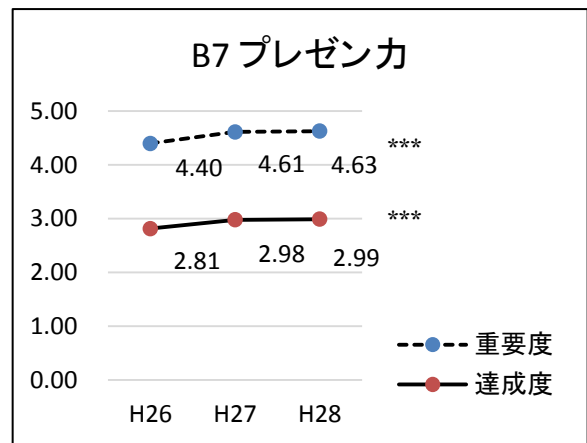


図 7

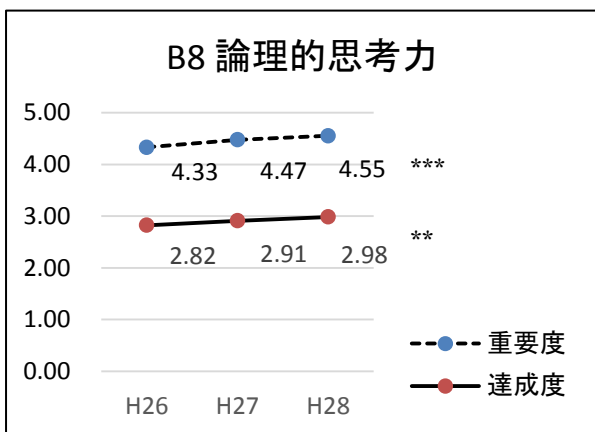


図 8

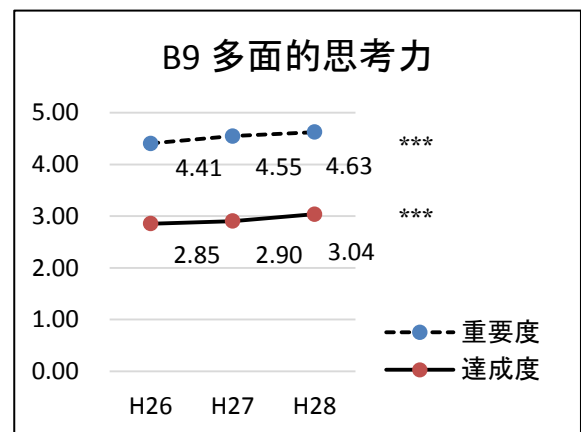


図 9

B「基盤能力」(図4～図9)については、SGH 英語高度化事業の成果もあり、B4「英語力」(図4)に対する「重要度」意識は極めて高く2年間上昇している。ただし「達成度」認識は微増にとどまっている。生徒の英語能力には向上がみられるほか、「SGH 事業アンケート(生徒)」では「達成度」評価が高い項目もあるので、「達成度」については、もう少し掘り下げて考える必要がある。課題研究の英文要旨作成だけでなく、成

果を英語でプレゼンする機会を設けたり、外部で実施される英語の課題発表やディスカッション等、積極的に参加させたりすることを通して自身の英語力の伸びを実感させ、さらなる学習意欲向上につなげていく必要がある。一方B5「外国語力（英語以外）」（図5）については、「重要度」は横ばいで「達成度」は低下している。本校では英語以外の外国語科目を開講していないので、今後英語以外の外国語事業をどう展開するかが課題である。

B6「情報力」（図6）、B7「プレゼン力」（図7）、B8「論理的思考力」（図8）、B9「多面的思考力」（図9）については、「重要度」「達成度」共に、生徒の意識は2年間一貫して上昇している。要因について、教科の授業改革等も進んでいることから、カリキュラム全体の検証が必要ではあるが、少なくともリサーチリテラシー育成を位置付けているSGH「課題研究」と、その前提となる「Kobeプロジェクト（総合的な学習の時間）」の成果があったことは確実である。しかしながら、B6～B9の各項目について「重要度」と「達成度」の意識較差が大きい。「達成度」を高めるため課題学習等における各基盤能力に対応したきめ細かな指導が課題である。

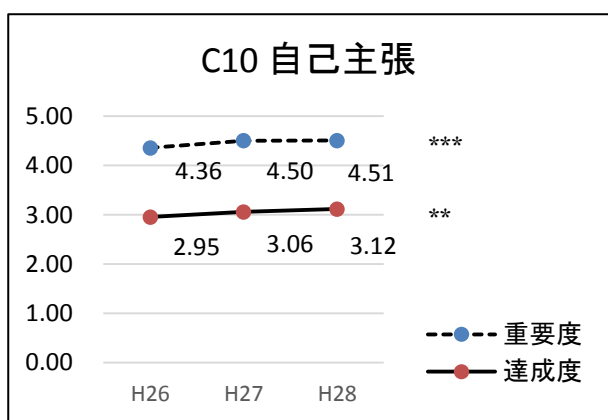


図 10

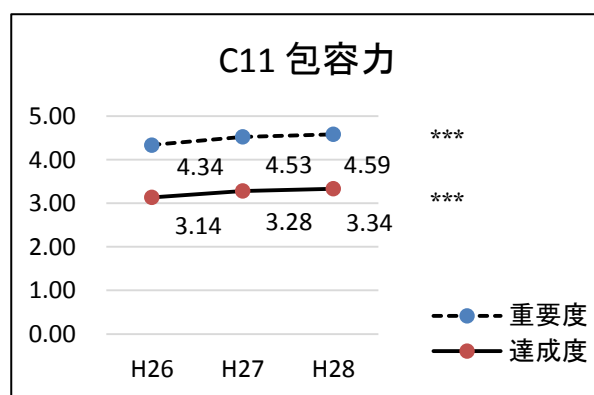


図 11

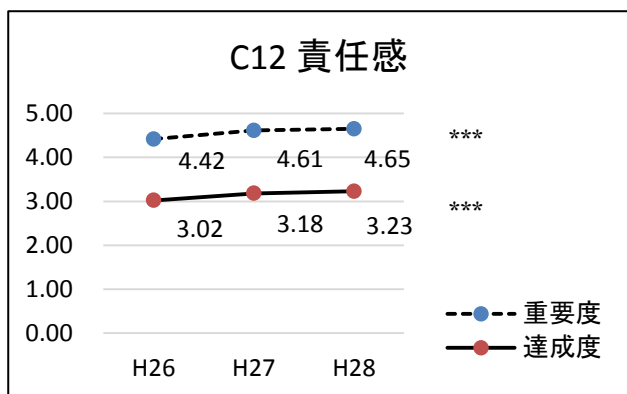


図 12

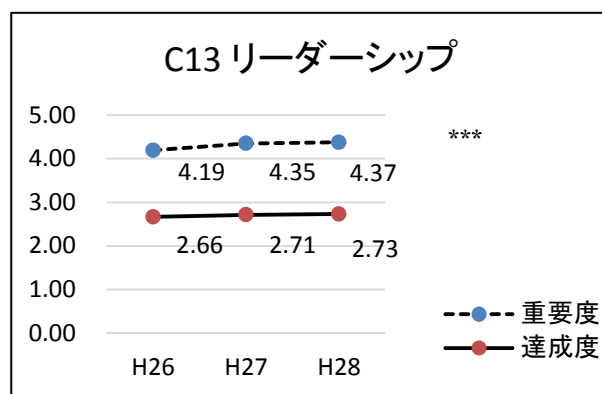


図 13

C「人間力」（図10～図13）の全項目（C10「自己主張」（図10）、C11「包容力」（図11）、C12「責任感」（図12）、C13「リーダーシップ」（図13））はグローバルキャリア人にとって必要な人格的要素すなわち「グローバルキャリア力」を意味している。これらの力の育成はSGH推進事業にとって極めて重要な要素である。意識調査では、この2年間で全項目の「重要度」が伸びている。また、C13「リーダーシップ」を除く3項目で「達成度」が上昇している。上昇の理由については、特別活動・課外活動を含む本校カリキュラム全体の検証が必要ではあるが、チームワークや異文化理解を必要とするSGH「GAP事業」等が貢献していることは確か

である。本校生徒の自己主張力（自己表現力）の高さや責任感の強さは各種発表でも評価されている。また、「SGH 事業アンケート（生徒）」では、GAP 参加者の 82%が国際的コミュニケーション力の向上を自身の成長としてあげている。ただし、C13「リーダーシップ」は他項目に比べても「重要度」「達成度」が低く「達成度」が停滞している。GAP の仙台交流プログラムでは、活動ごとにリーダー交代を行い、メンバーのなかでできるだけ多くの生徒がリーダーを経験できるように工夫し、成果をあげている（4章2の「パネルディスカッションの記録」参照）。このような取組を拡充し、プログラム遂行の中でリーダーシップが育つような改善を図る必要がある。

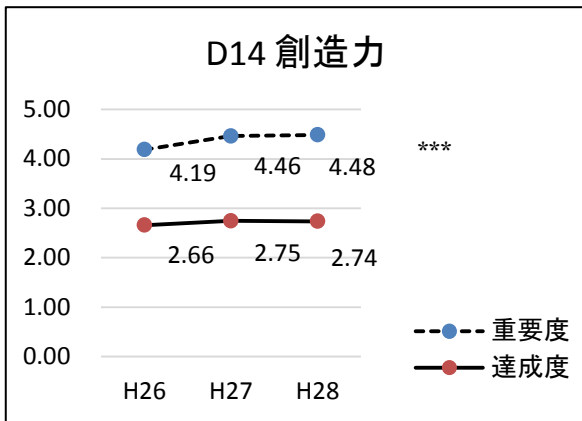


図 14

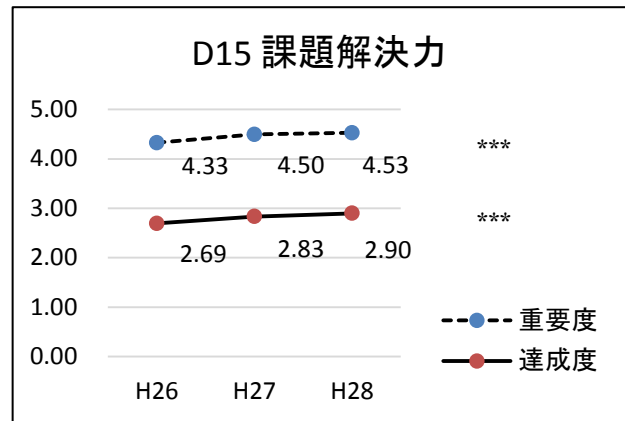


図 15

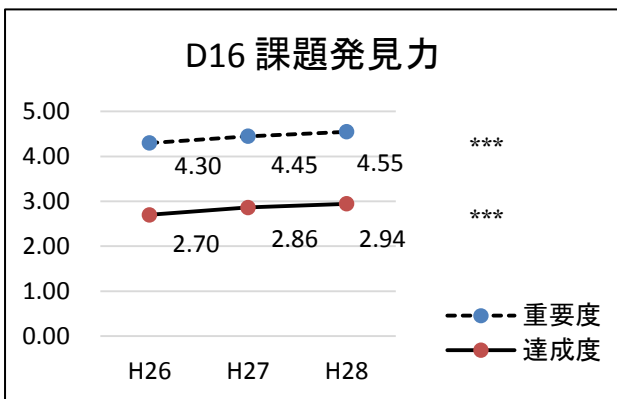


図 16

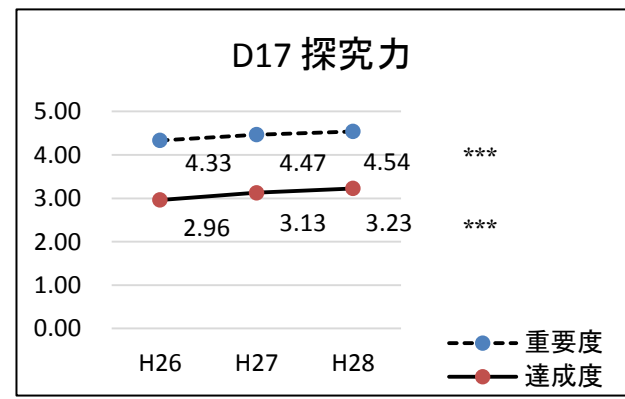


図 17

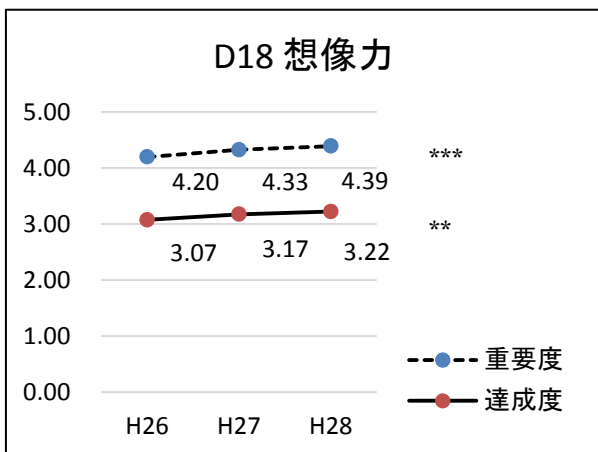


図 18

D「課題対応力」(図 14～図 18) について、D14「創造力」(図 14)、D15「課題解決力」(図 15)、D16「課題発見力」(図 16)、D17「探究力」(図 17)、D18「想像力」(図 18) は、全項目にわたって「重要度」が高い状態にあったが、D14「創造力」を除く 4 項目でさらに高くなっている。これは、本校が行っている SGH「課題研究」と、「Kobe プロジェクト（総合的な学習の時間）」をはじめとする各種事業に取り組んだ結果であると推察できる。ただ、詳しくみると、D14 (2.78)、D15 (2.90)、D16 (2.94) の「達成度」がやや低い。自律的で独創的な課題設定・解決力を高めるためには、B「基盤能力」

の各項目と同様に、「課題対応力」に対応するためのきめ細やかな指導が課題である。

E「経験力」(図 19～図 24) は、グローバルキャリア人にとって必要な「実践力」と置き換えることができる。本校 SGH 事業の最大の課題は、この「実践力」の育成にある。E19「国内異文化体験」(図 19)、E20「海外体験」(図 20)、E22「国内FW体験」(図 22)、E23「ボランティア経験」(図 23) では、「重要度」に関する意識は高まっている。しかし、「達成度」については、E22「国内FW体験」を除き停滞している。なかでも E24「世界貢献」(図 24) は低下している。要因については、カリキュラム全体の検証が必要ではあるが、GAP や課題研究をはじめとする SGH 事業全体として、「交流」「探究」については明確な目標として位置付けられているが、「貢献」を意識した積極性に欠ける面があると思われる。SGH 事業の成果を確認しつつ、「実践力」育成をどう打ち出せるかが今後の課題である。

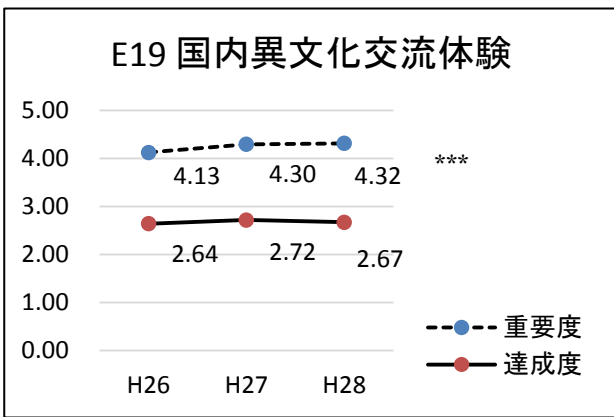


図 19

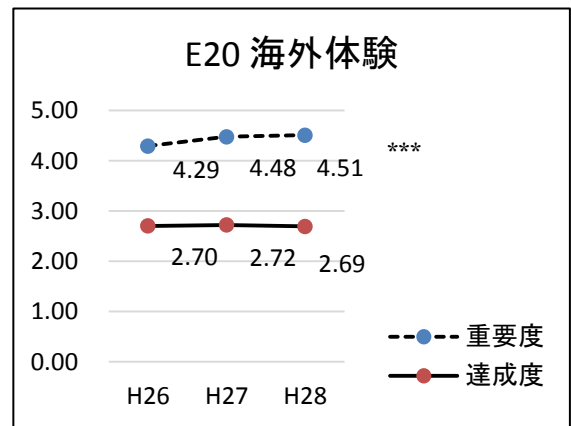


図 20

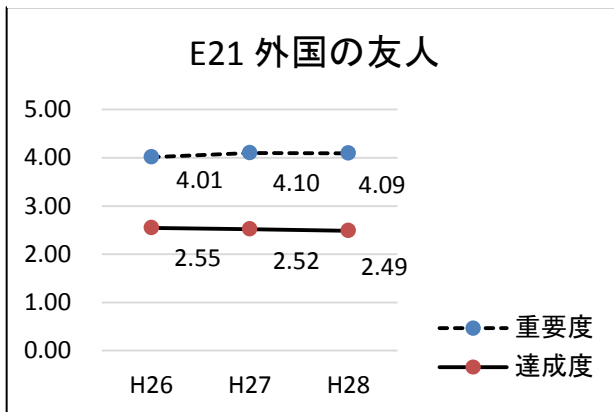


図 21

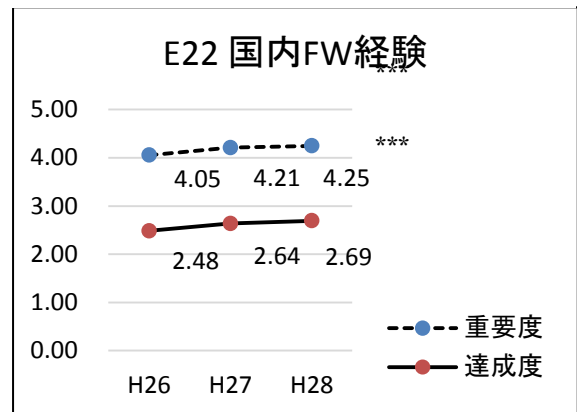


図 22

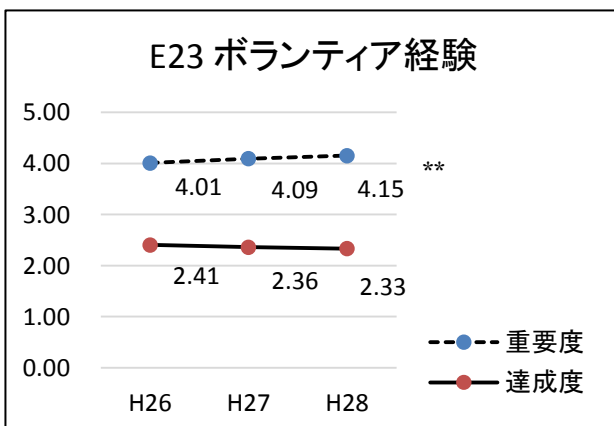


図 23

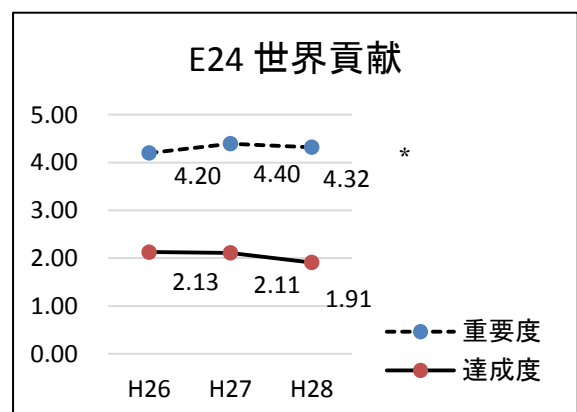


図 24

(1)RQ2:平成 28 年度における「グローバルキャリア人」定義に関する統計的ポジショニングについての学年比較および平成 27 年度同調査結果との年度比較

表 2 は、平成 27 年度と平成 28 年度のアンケート Q2 の「グローバルキャリア人」の定義（100 字程度）についての自由記述回答で出現頻度が高かった 10 個の単語（名詞及びサ変名詞。ただし、「グローバル」と「キャリア」の 2 語を除く）を学年ごとに抽出した結果である。

表 2 : 「グローバルキャリア人」の定義に関する各学年の出現頻度数 10 位までの形態素

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	H27	H28	H27	H28	H27	H28	H27	H28	H27	H28	H27	H28
1位	世界	自分	世界	世界	世界	世界	世界	世界	世界	世界	世界	世界
2位	自分	世界	自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分	自分
3位	文化	外国	外国	文化	解決	解決	意見	英語	意見	意見	意見	視点
4位	意見	意見	解決	意見	英語	外国	英語	貢献	英語	解決	視野	英語
5位	英語	文化	英語	英語	考え	英語	外国	解決	考え	物事	解決	物事
6位	外国	英語	考え	外国	外国	行動	行動	能力	文化	文化	行動	解決
7位	交流	経験	意見	理解	意見	意見	視野	考え	視点	英語	人物	知識
8位	知識	解決	貢献	考え	貢献	物事	考え	外国	物事	知識	考え	意見
9位	他国	行動	行動	行動	能力	課題	解決	活躍	行動	視野	活躍	文化
10位	解決	知識	人々	海外	活躍	視野	物事	理解	解決	海外	知識	活躍

平成 27 年度、平成 28 年度ともに全学年共通して出現頻度が高い語は、「世界」、「自分」、「意見」、「解決」（2 年生では 12 位に出現）である。「英語」と「文化」については、平成 27 年度には 6 年生では上位に出現していなかったが、平成 28 年度には高い頻度で出現している。平成 27 年度の 1 年生では「交流」が上位を占めていたが、平成 28 年度には「経験」や「行動」といった語が出現するようになった。「外国」という語が高頻度で出現するのは、5 年生までで、6 年生になると「視点」や「活躍」といった語が 2 年間ともに上位に頻出している。

平成 27 年度の同定義文の自由記述回答の「学年」と「単語」（名詞：出現頻度数上位 23 語とサ変名詞：出現頻度数上位 8 語）の対応分析の結果（図 25）から、1 年生と 2 年生の間に最初の発達の節目として意識の質的变化が生じ、4 年生を次の節目として 5 年生と 6 年生とグローバル意識の成長がみられた。平成 27 年度入学生より、附属小学校からの連絡進学者と外部受験者からなる背景の異なる生徒が混在しているが、本校で 1 年を過ごしたあとの意識の変容を読み取ることができた。SGH 事業が後期課程（4 年生以上）を中心に展開されているとはいえ、1 年間本校でグローバル教育を受けることが生徒のグローバル意識の成長に重要な意味を持つことから 1 年生から体験できる事業の導入を検討することとした。そして、平成 28 年度からは、平成 27 年度より SGH 基礎講座として実施していた神戸大学留学生との交流に加え、後期課程生徒のみに開講していたグローバルリーダーセミナーや神戸大学との連携授業を前期課程生徒にも参加対象を広げ、海外交流校（台湾、ベトナム）受入れ時の交流（給食交流等）を 1 年生でも実施した。また ESD Food プロジェクトも「食文化チーム」として 1 年生から参加生徒を募った。結果として、各セミナーやプロジェクトに多数の前期課程生徒が積極的に参加した。

また、前述のように、4 年生は 1 年生に次いで発達の節目を経験するが、1 年生～4 年生は「文化交流」から「世界貢献」への外向きの視点を獲得し、4 年生～5 年生は「外的行動」から「内的行動」への思考の深化がみられ、4 年生で 2 度の質的な変化を経験することから、4 年生には集中的にのぞましいケアをしていくことが

重要であることが示唆された(詳細な説明は、本校『SGH 研究開発実施報告書第 1 年次平成 27 年度』pp. 114-115 を参照のこと)。そのことを踏まえ、4 年生を対象とする事業として、平成 28 年度では、これまでの米国シアトルへの派遣事業に加え、台湾の交流校の受入れ(5 月の教育旅行受入れと 8 月の World Youth Meeting 受入れ)、ベトナムの交流校の受入れ(10 月)と派遣(11 月)、JICA 途上国教育行政官との交流(JICA 視察団との交流)とアジアや発展途上国との交流機会も増やし、3、4 年生対象のアートマイルの協働学習のテーマを「平和」に設定するなど、国際的課題について深く考える機会を設けた。

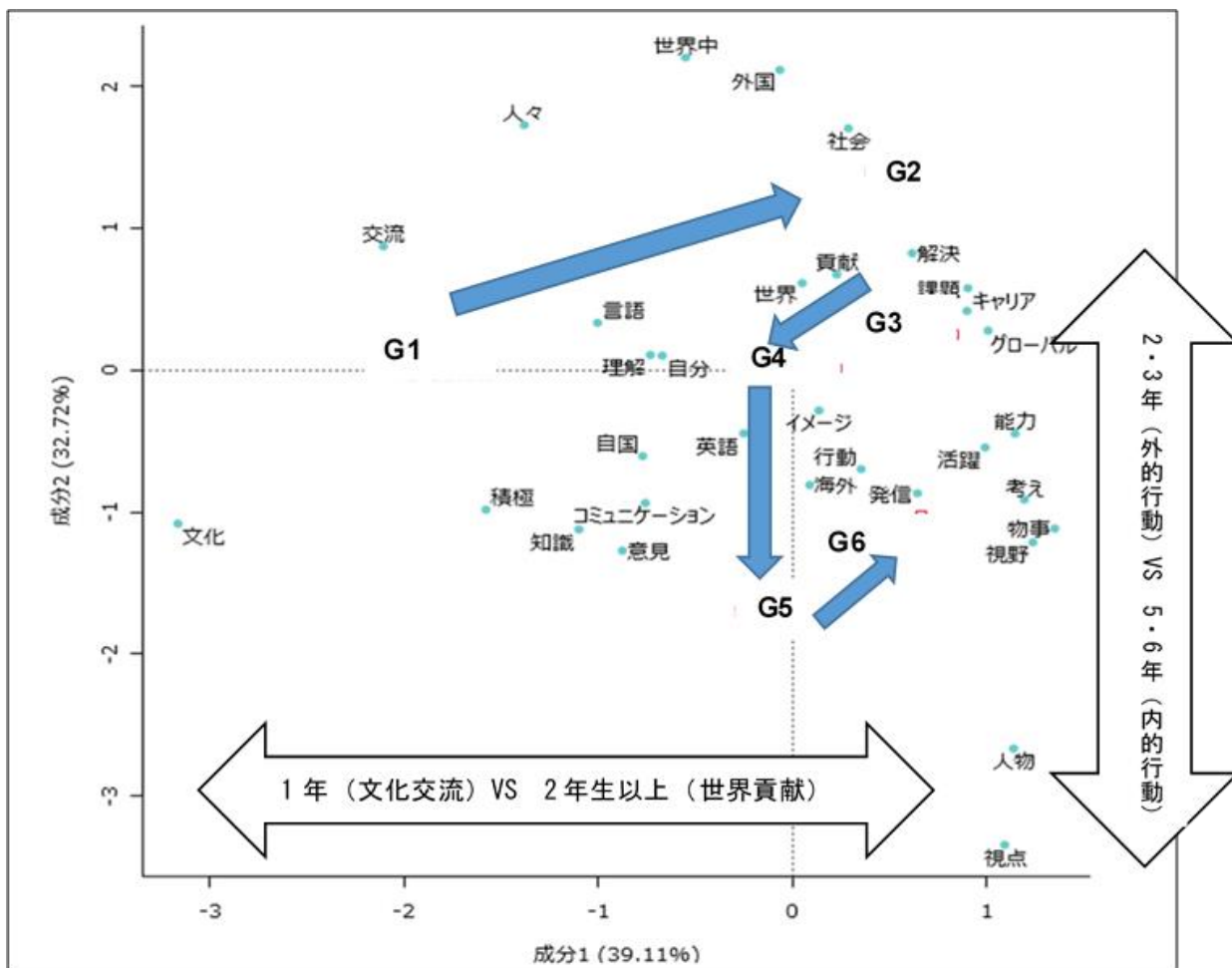


図 25：平成 27 年度のアンケート「グローバルキャリア人」定義についての自由記述における学年別頻出単語対応分析による散布図(『SGH 研究開発実施報告書第 1 年次平成 27 年度』 p. 115)

では、平成 28 年度について、学校全体として生徒のグローバルキャリア意識は、どのようになっているだろうか。

図 26 は、平成 28 年度の対応分析により「学年」と「単語」(名詞：出現頻度数上位 30 語とサ変名詞：出現頻度数上位 14 語)を散布図にマッピングした結果である。

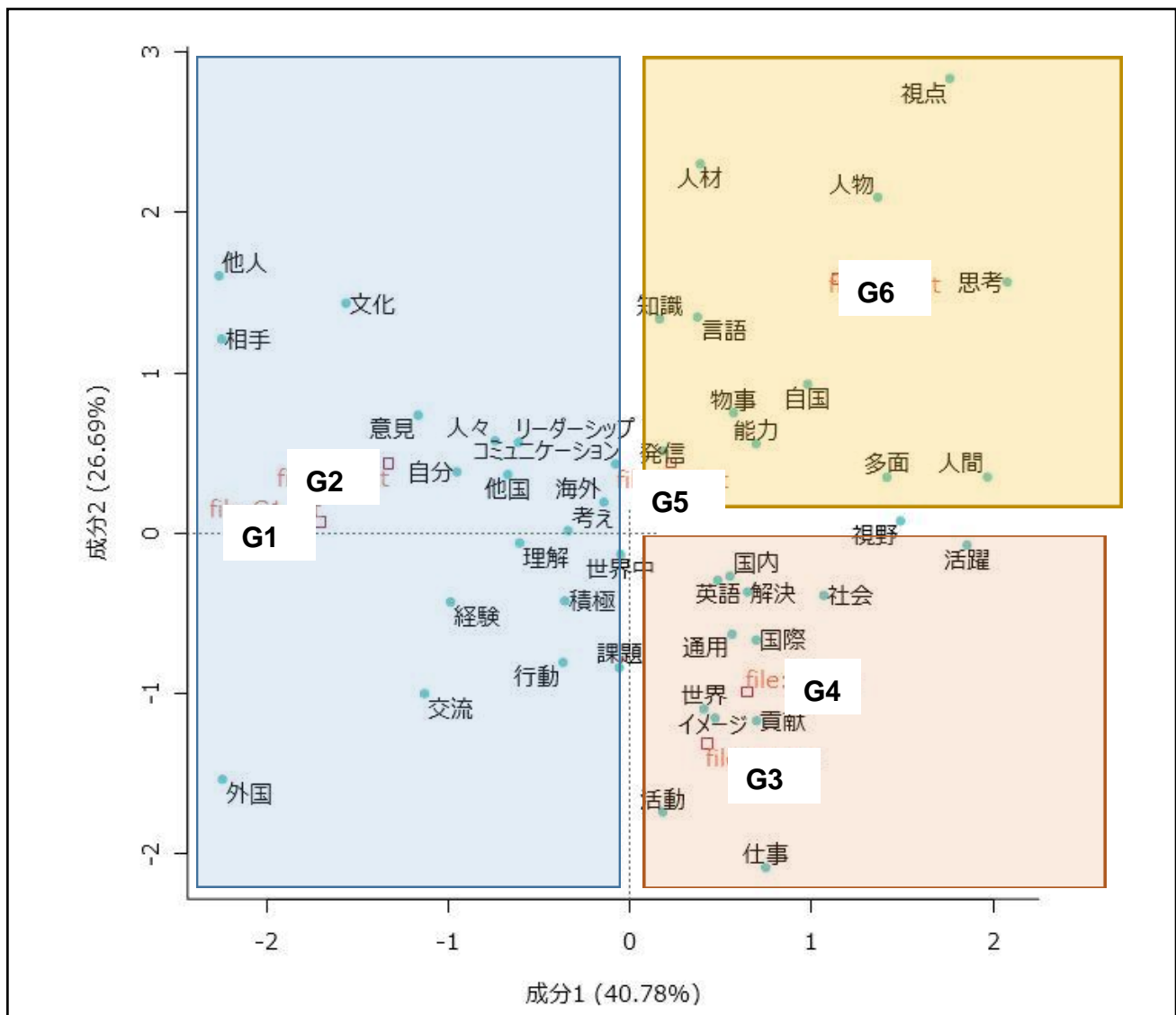


図 26：平成 28 年度のアンケート「グローバルキャリア人」定義についての自由記述における学年別頻出単語対応分析による散布図

データの連関の 40.78%を説明する「成分 1」軸（横軸）に注目すると、左側に 1 年生（G1）と 2 年生（G2）、右側に 3 年生（G3）～6 年生（G6）が集中して存在していることから、横軸は 1, 2 年生と 3 年生以上を区分する軸と解釈できる。

次にデータの連関の 26.69%を説明する「成分 2」軸（縦軸）に注目すると、上部に 6 年生（G6）と 5 年生（G5）、下部に 3 年生（G3）と 4 年生（G4）とに二分される。したがって、本校生徒のグローバルキャリア意識の成長においては、最初の発達節目は 2 年生から 3 年生の間、次の節目は 4 年生から 5 年生の間に認められる。

成分 1（横軸）と成分 2（縦軸）を連動解釈すると、データは第 1 象限（5～6 年生）、第 2～第 3 象限（1～2 年生）、第 4 象限（3～4 年生）の 3 群に区分される。

本校生徒のグローバルキャリア意識は、1～2 年生（第 2～第 3 象限）では、文化的な海外交流（外国、相手、他人、文化、交流、理解、経験）と、3～4 年生（第 4 象限）では国際貢献（仕事、活動、国際、解決）と 5～6 年生（第 1 象限）では多元的思考（多面、視点、思考）とそれぞれ深く関連している。

以上を踏まえると、平成 28 年度在籍生徒のグローバル意識の発達過程はおよそ以下の変容モデルにしていると考えられる（図 27）。

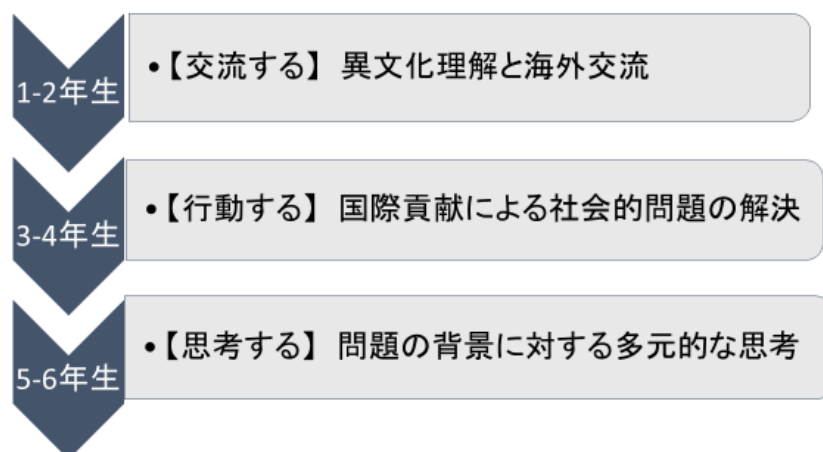


図 27 : 「グローバルキャリア人」の定義にみられるグローバル意識の発達過程モデル

前述のとおり、平成 27 年度より外部受験者の受入れがはじまり、1, 2 年生では多様な生徒が在籍している。学力的にも高い生徒が増え、前期課程生徒が参加できる SGH 事業（セミナーや校内における国際交流活動）も展開したことで、平成 27 年度に存在した 1 年生と 2 年生との間の境界はなくなり、本校基礎期にあたる 1・2 年生では異文化交流に対して積極的な姿勢がみられる。

また、3 年生の中でも 1・2 年生同様に前期課程にも対象が広げられたプログラムに参加することで、国際的な課題についての知識や理解が深まるとともに、国際貢献による社会問題の解決についての意識も高まり、充実期（3・4 年生）としての発達モデルが確立されている。

そして、発展期における 5・6 年生では、「自国や海外の問題について多面的に深く思考し、高い能力と広い視野をもって問題解決にあたり、国際社会で活躍できる人」になりたいという思いをもって高校課程を終えることになる。

### RQ3 : 平成 27 年～平成 28 年までの 3 回生（現 6 年生）と 4 回生（現 5 年生）の「グローバルキャリア人」意識の変化

さらに、平成 27 年度より SGH 指定が始まった平成 27 年度に後期課程に在籍していた 4 回生（現 5 年生、本格実施学年）と 3 回生（現 6 年生）の平成 27 年度と平成 28 年度の意識の変化を見てみると、成分 1 のみで左右に分かれる（図 28）平成 27 年度に頻出する「意見」「行動」「考え」「主張」「交流」「リーダーシップ」といった言葉に加え、平成 28 年度になると、「国内」「他国」「社会」「国際」「課題」「解決」などが頻出している。平成 28 年度には海外研修に参加し、先進国、途上国問わず現地での課題を身をもって体験した生徒はもちろんのこと、グローバル人材に不可欠な教養を身に付けることを目的とし、国内・海外における様々な問題について多角的に思考する機会を提供する神戸大学連続リレー講座に参加する生徒も増えたことや、JICA 視察団との交流活動を通して、自国の状況や問題とも向き合いながら世界的な課題について思考を深めた結果、漠然とした世界の捉え方から、日本と他国という比較の視点が強化されたことがうかがえる。



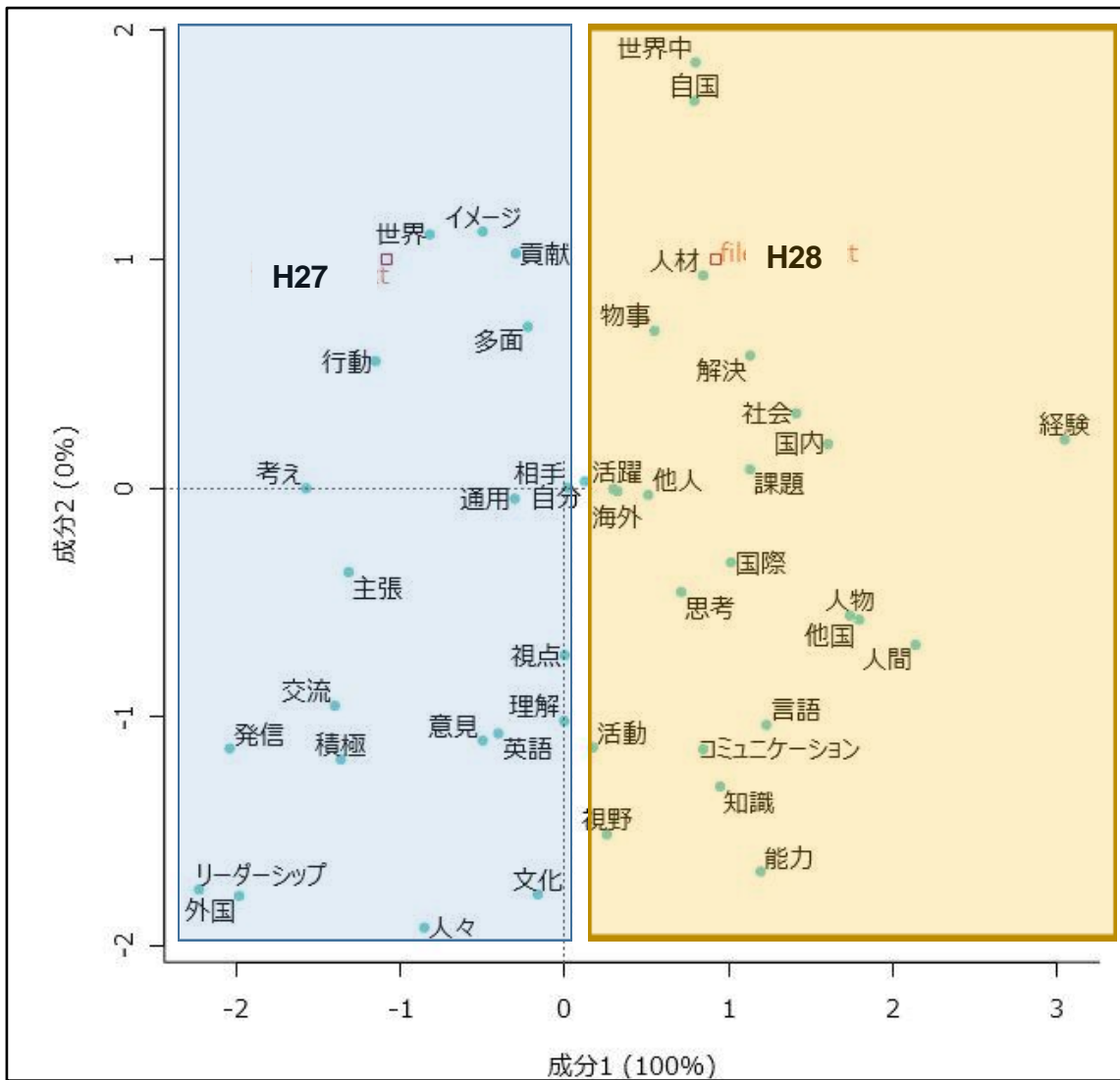


図 28 : 4 回生 (現 5 年生) と 3 回生 (現 6 年生) の平成 27 年度と平成 28 年度のアンケート「グローバルキャリア人」定義についての自由記述における頻出単語対応分析による散布図

## 6 まとめ

平成 27 年度と 28 年度の「グローバル意識調査」の結果と分析から、SGH 指定後 2 年間における生徒のグローバル意識の変容が明らかになった。今年度、本校が展開した「課題研究」や「Kobe プロジェクト」、「グローバル・アクション・プログラム (GAP)」、「教科の授業改革」等、SGH 事業として全校を挙げての取組は、総体として生徒のグローバル意識を高めていると推察される。しかしながら個々のプログラムがどういう形でグローバル意識の向上につながっているかについては、まだ十分な検証に至っていない。また、いくつかの課題も明らかになっており、次年度以降の課題としたい。

## 資料1：平成28年度「グローバルキャリア人」アンケート自由記述（Q2）〈抜粋〉

### 〔1年生〕

- ・私が考える「グローバルキャリア人」とは、英語が話せて外国の人々との交流ができる人だと思います。なぜならどんどんグローバル化が進んでいるので英語を話すことができればいろいろな面で良いと思うからです。
- ・自分の国の文化について深い知識を持ち、それを英語で、どんな人にも率先して説明できる人。また、交流する国について、インターネットで調べ、その際インターネットを一つの情報としてあつかうことができ、あくまで交流する本人との会話を楽しみながらできる人。

### 〔2年生〕

- ・たくさんの人とコミュニケーションをとることができて自分の意見もわかりやすく説得力もあって、相手の意見も理解することができる人。もちろん英語など各国の言語を話せたらすごくいいグローバルキャリア人になると思う。
- ・世界で活躍できる行動ができ、自分でやる事を見つけにいけ、リーダーシップがある人がグローバルキャリア人といえると思う。それだと、英語をはなせるようになっていたり、まとめる力が必要となる。

### 〔3年生〕

- ・自分の考えるグローバルキャリア人とは、英語を話せるのはもちろん、その英語を使って実際に外国人と世界の課題について、議論することのできる人です。また、積極的に、世界の諸問題を解決しようとする人だとも考えます。
- ・自分の国のことを十分に理解した上で、世界中の人と交流し、世界全体の課題を考えたり、それぞれの国の文化を尊重できる人。また自国の良さを発信するコミュニケーション能力や、問題を様々な視点から見て解決していくことができる人。

### 〔4年生〕

- ・世界と国内を把握した上で世界全体を引っばっていける人。その中で、ボランティアなど様々な立場の人の目線から物事を考えていくことができる人。世界に多く貢献している人を想像する。
- ・1つの視野だけにとられずに、様々な視点から物事を考えることができる人であり、リーダーシップを発揮することで社会や世界においてまで貢献できるような行動を自らできる人。また、国際的な交流も積極的に取り組むことができる人。

### 〔5年生〕

- ・私はグローバルキャリア人とは、世界を視野にいれた活動をしている一方で、しっかりと日本のことや、自分自身について、考えることのできる人だと思う。そのためには、日頃からの海外をみつめる視点や経験などが大事であると思う。
- ・自分を理解した上で自分とは異なる文化、背景、考えをもっている人も理解しようと努力できる人。自分の考えを相手に伝えようとして、考えることができる人。多面的に物事を見つめて、たくさんの立場で一つのものを見ることができる人。

### 〔6年生〕

- ・グローバルキャリア人とは、基本的な思考力や語学力や探究心を有し、異文化を理解した上で、国際的な課題を発見し、そのために尽力している人。また、そのことを責任を持ってすることができる人。
- ・広い視野と、自分と異なるものを受け入れる寛容さを持ち、自分の行動が世界に影響を与える自覚のある人。課題を発見し、想像力をもって課題を解決できる、国際社会に貢献することができる人。

### 【発表資料3】2015年度 グローバル・アクション・プログラム (GAP)

※12月現在。ブリュッセル研修の代替でカンボジア派遣実施)

※網掛は参加生徒に対する SGH 助成金対象プログラム。

海外派遣事業					
プログラム名	対象学年	人数	期間	交流校等	実施内容
カナダ語学研修	3・4	30名程度	7月	現地語学学校	カナダにおける英語・文化研修を通して、英語によるコミュニケーション能力を高め、現地家庭に滞在しながら、プリティッシュコロンビア大学訪問、現地語学学校研修等を実施。
シアトル研修	4	4名	10月	ICS (中高一貫校)	「グローバルサイエンス・イン・シアトル」をテーマに、神戸市の協力を得て、マイクロソフトやボーイング社を見学すると共に、ICS 訪問において、課題研究の成果を発信・交流。
ロンドン修学旅行	5	全員	11月	1 サイレンセスター 2 アランズ 3 トーマスハーディ	修学旅行の一環として実施。交流内容は次のとおりである。 1 サイレンセスター (グローバルサイエンス、バイオ) 2 アランズ (日英伝統文化比較) 3 トーマスハーディ (原子力発電・防災、国際貢献)
Asian Student Exchange Program (ASEP)	4・5	6名	12月	高雄師範大附属高級中学	World Youth Meeting (WYM) (於：日本福祉大学)の継続プログラム。台湾高雄市で12月26日(土)～30日開催。交流校にてプレゼン準備後本大会で発表{29日}する。
EUブリュッセル研修	5	5名	1月	モルランウェル学院	「先進的な国際協力・国際貢献をEUに学ぶ」をテーマに、神戸大の協力を得て、EU本部・議会・自由大学等を訪問すると共に、モルランウェル学院において、課題研究の成果を発信・交流する。 →フランスにおける同時テロ事件の影響により今年度は中止。
ブリズベン研修	4・5	未定	3月		ブリズベンは、神戸市の姉妹都市であり、本校への留学生も多い。また、アボリジニ、欧米系、アジア系、太平洋諸国出身者等、多様な文化をもつ人々が住む都市である。大学での研修に参加する。
国内交流事業					
プログラム名	対象学年	人数	期間	交流校等	実施内容
シアトル ICS 研修団受入れ	4・5	約60名	5月	ICS (中高一貫校)	米国の学生との交流を通じて、社会の様々な課題について日頃から考えたことを文化の異なる相手と意見交換を行わせる。今年度は24名の生徒を受け入れ、保護者の協力も得ながら書道や柔道、異文化交流体験等など特別授業をおこなったほか、1泊2日の京都・奈良研修旅行を実施し、両校生徒の交流を深めた。
アートマイル	3・4	約20名	7月～3月	Lé Likes (フランス)	海外生徒と共通テーマでテレビ会議等、インターネットを用いた協働学習を行い、巨大壁画を制作する活動を通して、日本文化と世界の文化を理解しようとする生徒を育成。課題学習の前段階のプログラム。今年度はフランスの高校と「水」をテーマに協働学習を行い、その成果を壁画に表現する。
名大高大連携プログラム「グローバルディスカッション」	4・5	5名	8月	名大附属東京学芸附国際等 SGH 校	英語での講義受講や、名大留学生との交流を通じ、英語によるコミュニケーション能力育成にもつながるプログラムである。「グローバル人材とは」をテーマに、英語で他校生徒とグループで議論、提言を作成し、最後にプレゼンテーションを行った。
神戸模擬安保理大会	4・5	11名	8月	兵庫県各校	神戸大学法学研究科が、元国連事務次長の明石康氏を招いて行う。国連安保理における多国間外交を学び、安保理に関する研究と正確な理解、解決策を考察する。今年度のテーマは「国連創設70周年記念決議」。法学部長賞(2014年度)、社会科学系教育研究部長賞(2015年度)受賞。
全日本高校模擬国連大会	4・5	2名 4名	11月	全国の選抜校	国連大学(東京都渋谷区)で開催。国連の多国間外交をロールプレイで学ぶことで、国際連合に及び国際関係に関する研究と正確な理解、解決策を考察する。2年連続出場。議題は「食料の安全保障」(2014年度)、「移民」(2015年度)。

プログラム名	対象学年	人数	期間	交流校	実施内容
仙台実施体験型学習プログラム	3~5	約20名	7月12月	仙台市立青陵中等教育学校 宮城県立多賀城高校 私立尚絅学院中学・高校 宮城大学	被災地間の中等学校における震災・減災・復興をテーマとした継続的な学校間交流。昨年度の交流実績を土台に、被災地東北を訪問し、被災地間の学校交流モデル「神戸・仙台モデル」の構築をめざす。現地のほか、復興庁を訪問する。(7月) 各学校に訪問のほか、東北学院大学と連携した津波堆積物ボーリング調査体験も行う。(12月)
神戸在留中高生フォーラム	3・4	約20名	9月	中華同文 カデイツ・アカデミー	神戸は、その歴史的経緯もあり、在留外国人が多い多文化共生都市である。生徒会GCCメンバーを中心に、昨年度の2校間交流を発展させ、フォーラムを実施する。今年度本校文化祭に両校生徒を招待し、交流した。
オックスブリッジサマーセミナー	3~5	30名程度	7月下旬~8月初旬	オックスフォード・ケンブリッジ	オックスフォードとケンブリッジ大学の学生3名を講師に招き、2週間にわたって英語研修プログラムを実施。取り上げる内容が高度なため、単なる英語研究に終わらないテーマ性の高い企画である。
神戸大留学生ワークショップ	4・5	全員	6月	オックスフォード	「課題研究」テーマとの関連を重視しながら、実施する。6月3日には人文学研究科よりオックスフォード大学からの留学生が来校。全体会での相互プレゼンテーションと英語の授業において交流。
JICA 使節団ワークショップ	4~6	全員	6月11月		国際協力研究科の小川啓一教授がコーディネーター。JICAの途上国教育施設団を迎え、「途上国の教育」、「途上国支援のあり方」等をテーマについて学習すると共に、英語での交流を行う。
神戸大学連続リレー講座	4・5	希望者	4~9月 10~1月		産業界・官界。政界のトップランナーによるオムニバス形式の講義に参加することにより、「グローバル化とは何か等を理解させる。生徒の興味・関心に応じて講座を選択させる。
グローバルリーダーセミナー	1~6	希望者	通年		様々な国際的な課題に取り組み、活動している専門家等を講師に招き、ワークショップ等を交えて聞くことにより、その課題について理解を深め、将来のリーダー育成を目指す。
NFLJ ディベート全国大会	4・5	6名	7月	全国高校生	品川女子学院、六本木ヒルズで開催。2名1組のパブリックディベートに参加。論題は「人口知能の是非」。オックスブリッジの講師にも指導を受けることができた。
全国高校生英語ディベート大会	5	5名	12月	全国高校生	岐阜聖徳学園大学岐阜キャンパスにて開催。論題は「自衛隊の海外派遣の是非」。兵庫県の予選を勝ち抜き本大会に出場決定。
備考	◎ブリュッセル研修の代替措置として以下の2つの研修を実施する。 ①「カンボジアスタディツアー」(5年生3名, 1月) ②「先進的な国際協力・国際貢献をEUに学ぶ」国内(東京)研修(5年生8名, 2月)				

## 【発表資料 4】 2016 年度グローバル・アクション・プログラム (GAP)

※以下の事業は、平成 28 年 4 月から平成 29 年 3 月までに実施したものである。

※★印の事業は、本校及び神戸大学の独自企画または、外部団体（他校）主催事業のうち、本校が学校として応募し、取り組んでいる事業である。

※ 網掛は参加生徒に対する SGH 助成金対象（後期課程生徒のみ対象）事業である。

※ EU ブリュッセルフォーラムへの派遣は連続テロ事件の影響から中止した。

※ SGH 経費より費用を支援する海外派遣事業への参加は、原則として 1 人年 1 回までとしている。

海外派遣事業					
プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容
★ B カナダ語学研修	3・4	24 名	7/24～8/5	現地語学学校	カナダにおける英語・文化研修を通して、英語によるコミュニケーション能力を高め、現地家庭に滞在しながら、大学訪問、現地語学学校研修等を実施する。
B 神戸市韓国青少年国際交流事業	2～5	4 名	8/5～8/8	大邱広域市役所等	神戸市主催の姉妹都市交流事業。大邱広域市を訪問し、現地でホームステイしながら文化交流や歴史探訪の活動に参加する。神戸市での選考がある。
B ひょうご・ロシアハバロフスク少年少女交流事業	1～4	3 名	8/14～21	ハバロフスク地方政府教育科学省青少年政策部等	兵庫県教育委員会主催の姉妹提携交流事業。ロシアハバロフスク地方を訪問し、自然保護区域における活動を通じて環境保護等について学ぶほか、現地青少年との交流やホームステイを通じて国際交流活動を行う。
★ B ロンドン修学旅行	5	全員 164 名	11/4～10	1 サレネスター 2 アランズ 3 コンバートンビレッジカレッジ	修学旅行の一環として実施する。交流校にてグローバルサイエンス、バイオ、日英伝統文化比較、震災復興等について発表・意見交換を行う。
★ G2 英国ケンブリッジ研修	5	5 名	6/24～7/2	コンバートンビレッジカレッジ (ケンブリッジ)	現地での調査活動を通して「グローバルサイエンスと拠点都市『神戸』」をはじめとする課題研究(特に気候変動・環境問題)における研究内容の充実を図る。現地交流校では理科と地理の教員が研究を支援する。
★ G2 米国シアトル研修	4	5 名	10/7～17	ICS (中高一貫)	「グローバルサイエンス・イン・シアトル」をテーマに、神戸市の協力を得て、マイクロソフトやボーイング社を見学するとともに、ICS 訪問において、課題研究の成果を発信・交流する。
★ G2 台湾 Asian Student Exchange Program (ASEP)	4・5	6 名	12/23～28	高雄師範大附属高級中学 (高校生)	World Youth Meeting (WYM) (於：日本福祉大学)の継続プログラム。台湾高雄市で開催。高雄市へ移動する前に台北研修も実施する。交流校にて共通テーマに基づき協働プレゼン準備後、本大会で発表する。
★ G2 ベトナムハノイ研修	4	6 名	11/6～13	ハノイ国家大附属外語 (高校生)	現地交流校生徒との交流及び調査活動を通して、東南アジアにおける平和及び異文化について理解を深めるとともに、ベトナムにおける民族独立の歴史、経済発展の成果と課題について学ぶ。
★ G2 カンボジア研修	5	6 名	1/13～20	JICA 事務所及び関連施設 プノンペン日本人学校	教育、環境、平和問題等、カンボジアの抱える様々な課題について研修する。アンコールワット遺跡群、JICA カンボジア事務所、JICA 支援関連施設、プノンペン日本人学校等の訪問を通して調査活動を行う。
G2 トビタテ！留学 JAPAN	4・5	3 名	夏季休業中	米国・豪州	日本学生支援機構の官民協働海外留学支援制度。生徒自身が立案・作成した計画に基づいて短期留学する。

## 国内交流事業

プログラム名	対象学年	参加者	期間	交流校等	実施内容
★ A 神戸大学連続リーダー講座	4・5	のべ102	6月～7月 全6回		産業界・官界・政界のトップランナーによるオムニバス形式の講義に参加することにより、「グローバル化とは何か」等を理解する。講座を選択受講する。
★ A 神戸大学経営学部との連携授業	1～6	48名	11/26		神戸大学経営学部教授による授業（①「キャリアを考えること。人生のルールを決めること」、②「会計は何を計算するのだろうか？」）及び実習（「報告書を通じて企業が伝えたいこと」）に参加する。
★ A グローバルリーダーセミナー	1～6	のべ 1,132名	通年 9回		様々な国際的な課題に取り組み、活動している専門家等を講師に招き、その課題について理解を深め、将来のリーダー育成を目指す。英語による講義も実施する。
★ B 台湾教育旅行受入れ	全 学年	24名	5/17	高雄師範大附 属高級中学 (高校生)	兵庫県国際交流協会主催の「教育旅行」で高雄市師範大学附属高級中学（本校交流校）の生徒35名を1日本校に受入れ交流することで異文化理解を深める。
★ B ベトナム 研修団受入れ	4	4名 運営 24名	10/14～ 10/22	ハノイ国家大 外語大附属高	ベトナムの高校生を4名ホームステイで受け入れ、交流する。日本語専攻の生徒も受け入れることにより、英語、日本語両言語による交流も期待される。受入れ期間中、ホスト生徒は京都、広島・宮島研修にも参加する。
★ B オックスブリッジ英語 サマーキャンプ	3～5	46名	7/24～8/6	オックスフ ォード・ケ ンブリッジ	オックスフォードとケンブリッジ大学の学生4名を講師に招き、2週間にわたって本校で英語研修プログラムを実施。六甲山YMCAで1泊2日の宿泊研修も実施する。
B 第1回PDA高校 生即興型英語デ ィベート合宿大会	4～6	4年 6名	8/11～ 8/12	全国の高校生	即興型英語ディベートの実践を中心としたプログラム。集中的に「英語での発信力」「論理的思考力」「プレゼン力」「コミュニケーション力」等を鍛える。合宿1日目の集中実践の成果を2日目の全国大会で発表する。
B 第2回PDA高校 生即興型英語デ ィベート全国大 会	4～6	4年 6名	12/24, 25	全国の高校生	即興型英語ディベートの普段の練習の成果を試し、全国の高校生と議論を交わすことで、さらなる成長・学習意欲を促すことを目的とする。1チーム3名で参加する。
★ B 神戸大留学生と の交流	4・5	全員	6/1	オックスフ ォード大学	人文学研究科よりオックスフォード大学からの留学生が来校。全体会での相互プレゼンテーションと英語の授業において交流する。
	1・2	全員	3月	各国留学生	SGH基礎講座として、神戸大学留学生に対し、英語のプレゼンテーション（日本文化紹介等）を行い交流することを通して異文化理解を深める。
★ B JICA視察団との 交流	4・5	1部 クラス 全員	6/28	途上国教育 行政官	国際協力研究科の小川啓一教授がコーディネーター。JICAの途上国教育使節団を迎え「途上国の教育」「途上国支援のあり方」等を学習するとともに、英語交流を行う。
★ B フランス中学と の交流	2	52名	通年	フランス・ ドルト中学	交流校の日本文化同好会「アトリエ日本 (Atelier Japon)」の生徒と英語を用いて文通やインターネット（電子メール、ビデオレター）を通じた交流を行う。
★ C1 ESD Food プ ロジェクト	1～5	63名	5月～1月	インド、インドネ シア、タイの学 校と国内の学 校	「食」に関する持続可能なライフスタイルをテーマとして、英語を用いて電子メールやSkype会議等、インターネットを用いた協働学習を行い、その成果を発表する。
★ C1 アートマイル	3・4	22名	7月～3月	SMA LAB School Gibubur	海外生徒と共通テーマでインターネットを用いた協働学習を行い、巨大壁画制作活動を通して、世界の文化や世界的課題を理解しようとする生徒を育成する。
C1 NFLJ ディベ ート全国大会	4	2名	7/30～31	全国高校生	大妻中野中・高にて開催。2名1組の英語パブリックディベート。今年度の論題は「個人の遺伝子検査の公共の健康に有益か」。
★ C1 World Youth Meeting (WYM)	3～5	5名	8/3～8	高雄師範大 附高級中 ほか	共通テーマ「10年後の世界（わたしたちがつくる）」に基づき、台湾の高校生を受け入れ、プレゼンを英語で作成、日本福祉大学で開催される大会で発表する。

★ C1 名大高大連携 「グローバルディスカッション」	4・5	5名	8/22～23	名大附属 東京学芸附 国際等 SGH	英語での講義受講や、名大留学生との交流を通じ、英語によるコミュニケーション能力育成にもつながるプログラムである。最後に提案型プレゼンテーションを行う。
★ C1 高校生 ICT Conference	4・5	9名	8/28	大阪地域の 高校生	ネットトラブルをテーマにワークショップ形式で議論を行い、代表者1名を選出。代表者は東京で開催されるサミットに参加し、各地での議論をもとに政府への提言をまとめるための討議を行う。
★ C1 社会科解説 提案討論会	1～3	のべ 41名	3・9・12月	大阪府下の 中学校9校	現代社会で注目されている内容から、芸術・文化まで、毎回設定されるテーマについて参加校が、調査・研究・提案・討論を行う。専門家による解説・講評も行われ研鑽を深める。
★ C1 全国 SGH 校生 徒成果発表会	4～6	3名	11/10	全国 SGH 校	東南アジア各国の高校生、SGH 指定校の生徒と持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムに参加し、SGH に関する成果や実践内容を発表する。
★ C1 全日本高校 模擬国連大会	4・5	2名	11/12～13	全国の選抜校	国連大学（東京都渋谷区）で開催。国連の多国間外交をロールプレイで学ぶことで、国際連合及び国際関係に関する研究と正確な理解、解決策を考察する。
★ C1 震災・復興・減 災仙台交流プロ グラム(DR3)	4・5	のべ 128名	通年 (8,12,3 月の交流)	仙台市内高 校、東北大 東北学院大 灘中高	神戸市と仙台市の高校生・大学生が交流しながら、大規模震災に対するリスクマネジメントについて多角的な視点から学ぶ。神戸と仙台におけるFW、復興庁訪問を経て、「世界津波の日高校生サミット」等で発表する。
★ C1 山陰海岸ジオ パーク交流プロ グラム(GGP)	4・5	のべ 11名	6,8,1月の 交流/巡検 学習活動	兵庫県立 大、鳥取環 境大、豊岡 高、岩美高	本県に位置する山陰海岸ジオパークの貴重な自然を活かし、現地高校生・大学生とともにFWを中心とした交流活動を行う。自然・科学の両面からジオパークを学ぶ。
C1 高校生科学技 術チャレンジ (JSEC)	4～6	1名 優等賞	12/10～11	全国高校生	科学ジャンルの自由研究を幅広いカテゴリーから応募する。学術的な研究のみならず、独創的な視点によるフィールド調査や実験レポート、実験装置の試作、製品開発など、意欲的な研究作品が選考される。
★ C1 Go Global Japan Expo	4・5	2名	12/11	以下 SGH 校 鳥取西、 出雲、関学、 同志社国際	文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業に採択されている42大学主催の進学や留学の相談・体験イベント（於：鳥取大学）。「SGH 体験発表」で口頭及びポスター発表を行う。
★ C1 高校生国際協 力実体験ミナ	4・5	4名	12/18	近畿圏高 校生80名	JICA 関西主催。世界が抱える問題についての理解を深め、それらの課題解決に向けて自身のライフスタイルや行動についてワークショップ等を通して学ぶ。
★ C1 ひょうご若者 ビジョンフォー ラム	4～6	3名	12/18	兵庫県大 学生・高 校生	兵庫県企画県民部ビジョン課主催。「ゆたかな兵庫とは？」をテーマに、グループ別に討議し、課題解決に向けての提案を発表する。
★ C1 高校生国際問 題を考える日・ ひょうご・こ うべワールド・ ミーツ for YOUTH	4・5	3名	2/11	近畿地区 SGH, アソ シエイト 校生徒	大阪大学との連携指定校における事業。今年度は「ひょうご・こうべワールド・ミーツ for YOURH」(G7 神戸保健大臣会合推進協議会)との共同開催。国際問題に関する研究発表（ポスター）及び講演会に参加する。
★ C1 SGH 甲子園	4～6	4名	3/19	全国 SGH・ア ソシエイト 校生徒	関西学院大学主催。課題研究について、Ⅰ. グループプレゼンテーション、Ⅱ. ポスター発表、Ⅲ. グループディスカッションに参加する。
C1 課題研究成果 発表(学会等)	4～6	15名	8月～3月 頃随時	学会・発表 会主催大学 等	課題研究の成果を学会（日本地理学会）や大学等主催の探究成果発表会等で発表。

注) 平成 28 年度は、外部団体（他校）主催の事業も含め、40 以上の事業を案内しているが、応募者がいなかったり、選考審査で不採択となったりした事業については本表から省いている。

## 【発表資料5】4回生「課題研究」テーマ一覧

Kobeプロジェクト（総合）の時間で実施している課題研究は、「グローバルキャリア人の育成」をめざす本校教育の総仕上げの取り組みです。同研究では、個人で論文を45枚（400字）以上書くことを義務づけていますが1回生から4年連続で、全員が45枚のハードルをクリアして論文を提出しています。以下、4研究領域ごとのテーマを紹介します。

### ■ 震災復興とリスクマネジメント

	テーマ
1	神戸大学附属中等教育学校の自然災害下での避難経路
2	災害看護による「心のケア」—災害看護の現状と課題
3	学校におけるこれからの防災教育の在り方—双方向的な防災教育は生徒の防災意識を高めることができるのか
4	神戸市の小中学生における減災教育のあり方とは—減災アクションカードゲーム神戸版の開発から考える
5	災害ボランティアは本当に必要なのか—あり方と共通認識について
6	東日本大震災におけるダークツーリズムの有用性—大川小学校を事例に
7	どのように東日本大震災を伝える？—被災者が求める震災遺構の残し方とは
8	震災で心に傷を負った子供たちを元気づけるミュージカルやダンスを使ったアウトリーチプログラム
9	舞台芸術による子供たちの心の変化—子どもたちのための震災からの心のケア
10	東日本大震災が与えたコミュニティ崩壊による心理状態の変化と地域再生の目指す姿とは
11	災害におけるSNSの在り方と需要—ブリスベン・神戸の2都市を比較しながら今後の災害に目を向ける

### ■ 国際都市『神戸』と世界の文化

	テーマ
1	児童期の運動遊びはどのような影響を及ぼすのか—ここ10年での子どものあそびの変化
2	中学校における不登校生徒の現状と解決策—兵庫県並びに神戸市を中心とした考察
3	スポーツビジネスの可能性—時代背景から考察したスポーツの新たな活用法
4	現在の恋愛問題の解決方法—恋愛心理学を使った解決策
5	広島東洋カープはなぜ優勝できたのか—ピッチャー・バッター・首脳陣の三方向から探る
6	行動心理学—行動心理学から私たちの生活へ
7	地域密着型プロスポーツクラブがもたらす経済効果
8	古文書が語る用水問題—江戸時代の住吉水系を通して
9	アニメによる地域活性化
10	女性ファッション雑誌における売り上げ増加のための要因とは—SNS普及・豪華な付録が与える影響とは
11	小学校でのコミュニケーション教育の現状
12	紫式部の憂悶—憂愁叙述より考察する罪業感
13	古典落語から学ぶ日常会話をテンポよく話すための方法
14	セブンイレブンにおける新たなビジネスプラン
15	人工島における必要性
16	ロコミから見る星野リゾート
17	テレビ離れは解決できるのか—マスメディアと人々の関わり
18	「善き生の多様性」からのベーシックインカム考察
19	これからの神戸市のあるべき姿—地方創生の視点から
20	ヒップホップカルチャーがアメリカの若者に与えた影響力—日本との比較と今後の可能性
21	姉妹都市交流の現状と考察—地域活性化の観点から
22	異文化理解と好感度—日本における異文化理解の方法
23	日本食はCOOL JAPANとなり得るのか
24	幸福論—日本における幸福度



25	日本における職場とコミュニケーションの現状と課題—人間関係の完成と不満
26	広告コミュニケーションがこれから発展していくための戦略—SNSでの口コミ利用とYouTube広告
27	ファッションの流行と社会情勢との関連性について
28	「日本の美」としての和の色の存続
29	和服産業の改善に向けての提案
30	ファストファッションブランドの展望—ユニクロ・ZARA・H&Mを比較して
31	メイクの流行と社会の関係性
32	一般人がファッションの流行を生み出し、経済を動かせるのか
33	どのようにしたら神戸赤レンガ倉庫は活性化するのか
34	奈良県のあるべき「観光地」としての姿とは
35	無電柱化—日本に適した電線・電柱をなくす方法
36	4スタンスを利用した日本サッカーの強化
37	社会で活躍できるリーダー像とは—本校がグローバルキャリア人育成のために取り入れるべき教育法
38	教員に対する信頼感と「理想の教員像」の考察—高校生の視点から面接調査法を用いて
39	占いを信じる心理的背景
40	購買意欲を促進するコンビニとは—行動心理に基づく新たな工夫の提案
41	ロンドンオリンピックに学ぶオリンピック成功の要因—ロンドンオリンピックにおけるレガシーの観点から
42	ペアディスカッションにかかる時間と男女差の関連性
43	Same Sex Marriage Law in Japan
44	高校生と中高年者におけるカタカナ語の影響についての研究
45	Jazzで使われるコード進行で一番聴きやすいコード進行は
46	感動する音楽とは—演奏者の視点から
47	J-POPにおける音楽のもつ力について—なぜ人々は音楽を聴いて涙を流すのか
48	インバウンドマーケティングにおける商品戦略—ぼんち揚を事例に
49	コンビニエンスストアにおける業態変化—コンビニコーヒーを事例として
50	兵庫県における外国人観光客戦略の実態—行政機関に着目して
51	映画館の立地の変遷と映画産業の動向分析

■ 提言：国際紛争・対立から平和・協力へ

	テーマ
1	日本における刑罰の問題点—刑罰思想史と法制史の観点から
2	独仏歴史認識と相互理解の試み—共通歴史教科書の分析を通して
3	台湾における日本の植民地教育の考察—日本統治下の公学校修身書(台湾)と尋常小學校修身書(日本)を比較して
4	神戸に国際博覧会を誘致するには—環境調和と地域活性化に注目して
5	神戸と台湾に於ける樟脳取引史—鈴木商店を中心に考察する
6	鉄道事故による安全性向上の歴史的考察—旧国鉄及び近鉄事故の教訓・改善分析
7	神戸米騒動と新聞報道—社会運動史とマスメディアの関係についての考察
8	神戸におけるユダヤ人難民—第二次大戦期における動向について
9	移民問題から考える日本の歩むべき道—グローバル化とは何か
10	日本の食料廃棄及び貧困を解決するために—フードバンクを通して
11	改憲問題における言語学的知見に基づいたテキスト分析の有用性について
12	WEB政治キャンペーンのマーケティング視点の分析—EU離脱の是非を問う国民投票と米国大統領選を事例として—
13	日本の水に関する環境政策—EUの環境政策に学ぶ
14	日本における難民問題—在日外国人の犯罪率から考える日本社会
15	難民・移民問題の現状と展望—受け入れる国と受け入れない国
16	イスラームの今後の動きと付き合い方—アラブの春から読み解く
17	土地が商品につける付加価値—神戸ブランドを事例に
18	ファーストリテイリング社の魅力—目覚ましい発展の裏側に迫る

19	港町神戸の過去・現在・未来—21世紀を生きる町づくり
20	激化する日本のコーヒージネスにおいてなぜスターバックスコーヒージャパンが優位性を保っているのかの考察
21	より有用性のある司法取引とは
22	日中関係改善に向けての提案
23	カンボジアにおける教育システムについて—ポル・ポト政権によって廃止された教育システムを再構築することはできるのか
24	多様な魅力が共存する社会へ—私たちが求めている理想の姿とは
25	日本の「殺処分」にどう対処すべきか—世界の事例から
26	民主主義社会に必要な人材育成とは—ドイツを事例として
27	待機児童問題の解決に向けて—認定こども園をめぐる課題と神戸市の待機児童解消策の提案
28	児童養護施設が存在について—あるべき姿と役割
29	ポイ捨てゴミの現状と課題・対策
30	企業内保育所の可能性—待機児童問題の解消
31	人に影響を与える演説とは—黒人差別問題に焦点を当てて
32	人口減少時代における「地方創生」が目指すべき”まち”のすがた—「消滅可能性とし」再生の条件
33	Sun Mall 活性化計画
34	経済地理学的視点からみた持続可能な鉄道のあり方—第三セクター鉄道の出資比率別考察
35	安楽死を認める国・認めない国の価値観の違い—安楽死は日本に必要なのか
36	日本における人工妊娠中絶の今とこれから女性へのケア—海外の事例と比較して
37	第4次産業革命により変化する社会で必要とされる人間になるには？

## ■ グローバルサイエンスと拠点都市『神戸』

	テーマ
1	サウンドマスキングを用いた騒音対策は本校舎に有効か？
2	プロ野球選手における選手生命を怪我から守るためには—選手を守るための既存のルール、新しいルールの導入は必要か
3	足関節捻挫と予防プログラム—高校生の怪我に対する意識と現状
4	外発的モチベーションおよびメンタルトレーニングによってメンタルコンディションを向上させることは可能か
5	アイシングが運動パフォーマンスに与える影響
6	モチベーションが運動能力に及ぼす影響
7	数理モデルより示す適切な施設建設場所—待機児童問題解決に向けて
8	子どもの貧困から考える子どもにとっての食事と教育のありかた—子ども食堂の役割と今後のありかた
9	日本のホスピスにおける現状と課題—海外と比較して
10	記憶力と食べ物との関係—パン食とごはん食どちらがいいのか
11	コンビニエンスストアの食材の危険性—添加物から危険性を解析する
12	中高生における朝食摂取の現状と改善—洋風パン食と和風ご飯食の比較
13	勝飯—五大栄養素から考えるアスリートの食事
14	スポーツ選手の食事管理—自分の力を最大限に発揮するためには
15	朝食を摂ることによる成績の変化—現代の高校生を対象とする調査
16	色が人に与える心理的な影響
17	抗がん剤の有無による患者の心理的な違いから考えるがん治療の選択方法について—インタビューと体験談から
18	日本におけるがん治療の現状と課題
19	在日外国人に対する医療提供の改善に向けての提案
20	兵庫県神戸市における山麓冷気流の実態解明
21	神戸市における冷気流と広域陸風が相互に及ぼす影響の解析
22	兵庫県神戸市における冬季気温分布調査
23	神戸市のイノシシ市街地出没と住民意識の改善—餌付け禁止の啓発に向けて
24	米の粘り気の違いと人の味覚の関係性
25	環境変化におけるカイワレ大根の成長

26	カーネーションの茎の長さによって変わる着色の幅
27	フタホシオオロギの嗅覚能力について—昆虫の可能性を追求する
28	閉鎖環境下でのミドリムシの長期飼育—地球共生循環のモデルを目指して
29	オイカワの同種に対する攻撃の判別方法の解明
30	学校机における使用済み雑巾での水拭き清掃の課題と改善—菌の視点から
31	ゆとり教育と数学—なぜゆとり教育は失敗したのか
32	遺伝子情報活用への検討—世界から見る日本の現状と課題
33	カワラサイコの絶滅危機について—ロジスティック方程式とDPSIRモデルを用いた体系的評価
34	睡眠と記憶の関係について
35	ホンダ NSX が世界で高い評価を受けた要因と、そこから見出せる日本のスポーツカーの今後の課題
36	iPS 細胞の今後—3カ国の現状の比較と分析
37	局地風が都市の気温に及ぼす影響—六甲おろしを事例として
38	これからの航空機産業
39	本校学生における食生活—生活習慣との関連
40	金属イオンが鞭毛の運動能に与える影響
41	生物から学ぶバイオミメティクス—バイオミメティクスの活用
42	水素水の信憑性と課題—植物実験による効果検証
43	生徒の学習内容を高める論文作成プログラムの検討—学習者の論文に対する達成度の調査検証から
44	国際河川問題から考える水の安定供給
45	医療における国内外への関わり方の将来—日本とカンボジアを事例に
46	無侵襲的出生前遺伝子学的検査(NIPT)導入の課題—「命の選別」の助長を防ぐには
47	安全なワクチンを接種するためには—医療の変遷から考える
48	子どもの健康をめぐる社会の現状と課題—小児科医療の観点を踏まえ考える
49	地域医療から見る日本の医療格差—兵庫県における最善策とは
50	望まれない出産をも受け容れられる社会の在り方とは—「赤ちゃんポスト」が私たちに問いかけるもの
51	日本の終末期医療における尊厳死—死ぬ権利の法制化は可能なのか
52	徘徊ネットワークの意義と課題—住み慣れた環境で暮らし続けるには
53	ターミナルケアにおける倫理的問題—がんを例に考える
54	脳死の問題から人の死についての考察—臨死体験の事例より脳の可逆性と死の定義について
55	人工知能と我々の未来—人間が磨くべきスキルとは
56	ヒトと人工知能の関係—人はアンドロイドに恋をするか
57	ゲーミフィケーションを利用した新しいアプリケーションの提案—ゲーム要素を利用したアプリケーションの設計
58	落下時の水の回転運動の静的原因
59	光合成とクロロフィル濃度の関係性
60	クローン人間は「悪」なのか—複数の倫理的視点からのクローン人間作成反対に対する考察と批判
61	葉毛は蒸散を抑制するか
62	藻類バイオマスの実用性
63	医療と社会の境界線—医療の発展は必ず社会の発展につながるのか—

## 【発表資料 6】「課題研究」論文 評価基準

### 1. 執筆者情報（略）

### 2. 評価

#### 1. 問題提起、研究手法、結論が首尾一貫しているか

##### (1) 問題提起

- S A かつ先行研究を十分に踏まえたうえで、独自の観点を示している。
- A 研究結果が問題解決に寄与する問いを立てている（結果は失敗でもよい）
- B 研究して結果が出る問いを立てている（結果は失敗でもよい）
- C 問題意識はあるが、研究につながる問いの形に十分になっていない

##### (2) 研究手法

- S A かつ方法に独創性がみとめられる。
- A 問いに対応し、結果が問題解決に寄与する研究手法を選択できた
- B 問いに対応し、結果が問題解決に部分的にでも寄与する研究手法を選択できた
- C 問いに対応した研究手法を選択できていない

##### (3) 結論

- A 結論を簡潔にまとめている（今後の課題を付加していてもよい）
- B 議論・分析の結果を書いている
- C それまでの議論と関係のないことを主に述べている

##### (4) 叙述の一貫性

- A 序論・本論・結論を通じて一貫性のある議論ができている
- B 序論・本論・結論を通じて一貫性のある議論が部分的にできている
- C 序論・本論・結論を通じて一貫性のある議論がなされていない

##### (5) 題目と内容の一致

- A 題目に応じた内容となっている
- B 部分的に題目を反映した内容となっている
- C 題目をほとんど反映しない内容となっている

#### 2. 説得力のある結論を導くことができているか

##### (1) データの質

- A 結論を導き出すのに必要十分なデータを集めている
- B 結論を暫定的にでも導くことができるデータを集めている
- C 結論を導くにいたるデータを集められていない

##### (2) データの分析

- A 選択した研究手法に応じたデータ分析が十分にできている
- B 選択した研究手法に応じたデータ分析が部分的にできている
- C 選択した研究手法に応じたデータ分析がなされていない

##### (3) 根拠の提示

- A 参考文献と注が統一的に整えられている（著者名等の順序、五十音順、注の頁数有無）
- B 注がつけられている（参考にした情報源がわかる）
- C 引用・参照に不備（他人の意見と本人の意見の区別がつきにくい形で書かれている）

##### (4) 論文にオリジナリティはあるか

- A オリジナリティのある研究としてみとめられる
- B 高校生なりのオリジナリティがある
- C オリジナリティはない

### 3. 評価欄（略）

### 4. 査読者所見（略）